

京都市内遺跡試掘調査概報

平成 8 年度

京 都 市 文 化 市 民 局

序

京都は、世界に誇れる数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内には多くの埋蔵文化財包蔵地があり、その遺跡は年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みがある複合遺跡であります。

これらの埋蔵文化財は、わが国の歴史や文化の成り立ちを知ることができます。国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存すべきものであります。近年、土木工事等による開発行為は、これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしております。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その開発と保存との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があると考えています。

本報告書は、平成8年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の概要報告書であります。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが行い、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであります。

結びにあたりまして、このたびの各調査に御理解と御協力を賜りました市民の皆様を初め、御指導と御助言を賜りました関係の方々に、心から感謝を申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役立ていただければ幸いに存じます。

平成9年3月

京都市文化市民局
局長 溝 郁 生

例　　言

- 1 本書は、京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成8年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。
なお、本書は平成8年1月から12月まで実施した試掘調査の概要を報告している。
- 2 試掘調査を実施した全ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（37～40頁）している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1～13 1/8,000　　図版14～19 1/10,000
- 5 本書に使用した土壤色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、丸山裕見子・三竹史朗の協力を得た。
- 7 本書作成、調査実施にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、次の機関の協力を得た。

京都市文化市民局文化部文化財保護課・(財)京都市埋蔵文化財研究所

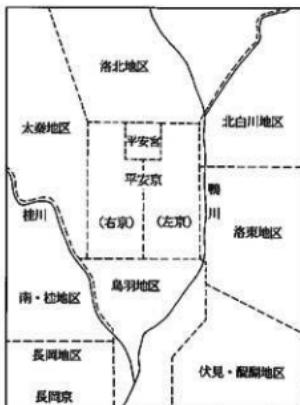


図1　調査地区割図

目 次

頁		頁	
I 試掘調査の概要	1	V 最勝寺跡	21
1 調査の概要	1	1 調査経過	21
2 地区別調査概要	2	2 遺構・遺物	21
3 まとめ	3	3 まとめ	22
II 平安宮主水司跡	4	VI 橋原廃寺跡	24
1 調査経過	4	1 調査経過	24
2 遺構	5	2 遺構	25
3 遺物	6	3 遺物	27
4 まとめ	6	4 まとめ	30
III 平安京右京三条二坊一町跡	9	VII 淀城跡	31
1 調査経過	9	1 調査経過	31
2 遺構	9	2 遺構	32
3 1次調査出土遺物	10	3 遺物	34
4 遺物包含層出土遺物	16	4 まとめ	36
5 池跡埋土出土遺物	16		
6 まとめ	18		
IV 平安京右京四条二坊十二町跡	19	報告書抄録	41
1 調査経過	19		
2 遺構・遺物	19		
3 まとめ	20		

図版目次

- 図版1 平安宮
- 図版2 左京北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版3 左京北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版4 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版5 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版6 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版7 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版8 右京北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版9 右京北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版10 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版11 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版12 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版13 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版14 植物園北遺跡・大宮北山ノ前窯跡・元稻荷窯跡・北野廃寺跡
- 図版15 白河街区跡・史跡仁和寺御所跡・北白川廃寺跡・小倉町別当町遺跡・櫻原廃寺跡
- 図版16 中臣遺跡・山科本願寺跡・福西古墳群・淀城跡
- 図版17 伏見城跡
- 図版18 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡
- 図版19 長岡京跡

挿 図 目 次

頁	頁
図1 調査地区割図例言	20
図2 平安宮復元図と調査位置4	21
図3 調査位置図4	22
図4 平安宮官衙の推定範囲と調査位置5	22
図5 検出遺構の平・断面図6	23
図6 土層断面図（東壁）6	24
図7 出土遺物実測図7	25
図8 平安京条坊図（調査位置）9	25
図9 調査位置図9	26
図10 トレンチ配置図10	27
図11 拡張区東壁断面図10	28
図12 遺構実測図12	29
図13 1次調査出土土器実測図13	30
図14 2次調査出土土器実測図114	31
図15 2次調査出土土器実測図215	31
図16 平安京条坊図（調査位置）19	33
図17 調査位置図19	33
図18 トレンチ位置図20	34
図19 軒丸瓦拓影及び実測図20	35
図20 調査位置図21	
図21 最勝寺跡推定範囲とトレンチ位置図22	
図22 瓦溜部分の断面図（東壁）22	
図23 出土遺瓦拓影及び実測図23	
図24 調査位置図24	
図25 横原廃寺跡公園と調査位置図25	
図26 検出遺構実測図26	
図27 西調査区検出遺構実測図27	
図28 調査区南壁断面実測図28	
図29 出土遺物の拓影及び実測図29	
図30 調査位置図31	
図31 トレンチ配置図31	
図32 検出遺構平面図33	
図33 検出石垣立面図33	
図34 検出石垣断面図34	
図35 出土瓦拓影及び実測図35	

表 目 次

頁	頁
表1 地区・年度別試掘調査実施件数一覧表	1
表2 試掘調査一覧表	37~40

写 真 目 次

	頁
写真1 検出した築地状の高まり（中央）と南北溝跡（左下）（北東から）	8
写真2 拡張区全景（南から）	11
写真3 池跡近景（南東から）	11
写真4 池跡汀ライン（東から）	16
写真5 瓦溜部分（北西から）	22
写真6 東調査区の土堤状遺構（上方）（西北から）	25
写真7 西調査区の中世の柱穴（北から）	25
写真8 調査区完掘状況（南西から）	30
写真9 石垣検出状況（南西から）	32
写真10 北列石垣検出状況（東から）	32
写真11 石垣屈曲部近景（南から）	32

I 試掘調査の概要

1. 調査の概要

京都市埋蔵文化財調査センター（以下「センター」と呼ぶ）は、市内の周知の埋蔵文化財包蔵地内で行われる建築・土木などの各種工事計画について、事前に京都市都市計画局建築指導部指導課・審査課、都市建設局土木部開発指導課、消防局各消防署予防課など、他の行政指導部局と連携し、文化財保護法に基づく届出書や通知書を受理し、工事の規模内容や遺跡の残存状況に応じて、発掘調査・試掘調査・立会調査・分布調査など、遺跡の保護に適合した調査を指導している。また、平成8年度には第6回目の『京都市遺跡地図』改訂出版を行い、遺跡の周知徹底に努めている。

センターでは、申請を受理して指導した物件のうち、遺構の残存状況確認や発掘調査実施の判断が必要なものについては、事業主の協力を得て工事前にセンターが試掘調査を実施し、埋蔵文化財の掌握に努め、よりきめ細やかな行政指導を行っている。

この概要報告書は、京都市埋蔵文化財調査センターが平成8年1月10日から12月18日まで、ほぼ1年間に実施した試掘調査の結果をまとめたものである。

表1 地区・年度別試掘調査実施件数一覧表

分類	区域名	1~3月末	4~12月末	計	発掘指導	設計変更
埋蔵文化財	平安宮地区	2	8	10	1	0
	平安京左京地区	3	* 4	7	2	1
	平安京右京地区	3	* 18	21	3	0
	洛北地区	* 1	6	7	2	0
	北白川地区	2	1	3	0	0
	洛東地区	1	4	5	0	1
	伏見・醍醐地区	1	1	2	0	0
	鳥羽地区	5	10	15	0	2
	南・桂地区	1	2	3	0	0
	長岡京地区	1	4	5	0	1
	(小計)	20	58	78	8	5
*史跡指定地		1	2	3	0	1
	合計	21	60	81	8	6

*他に史跡指定地ありを示す

2. 地区別調査概要（37～40頁の試掘調査一覧表・図版1～19参照）

平安宮地区 平安宮跡内では、朝堂院・中和院・中務省・大蔵省・主水司・真言院・左馬寮に推定される場所10件について試掘調査を実施した。

朝堂院跡では、内廷部分に当たる千本通りの東側3箇所の試掘調査を実施したが、いずれも近世から近代にかけての擾乱が著しく、重要遺構・遺物の検出には至らなかった。

内裏とその西側にあった中和院跡推定場所の試掘調査では、地表下0.9m程のところから平安時代の整地層を検出し、発掘調査を指導した。また、中務省の東にあった主水司跡推定地では、近世の擾乱が著しい場所であったが、狭小な範囲から東限築地跡とみられる遺構を検出し、平安時代前期に遡る土器・瓦などが出土した。そのほかは、有力な遺構・遺物は検出していない。

平安京左京地区 左京地区では、合わせて8件の試掘調査を行った。

工場跡にマンションが計画されていた左京五条一坊四町跡では、工場基礎以外の場所から鎌倉時代の遺物包含層や土壌・柱穴を検出したことから、発掘調査を指導した。

また、京都駅前の左京八条二坊十四町跡では、室町時代の遺物包含層を検出したことから発掘調査を指導した。そのほか、史跡指定地に当たる西本願寺境内では、百華池の浚渫工事に伴う試掘調査で、井戸跡（中世期か）の底部分を2基検出した。

平安京右京地区 右京地区では合わせて22件の試掘調査を実施した。

府立体育館南側の右京一条三坊二町跡からは、地表下0.5m程のところから平安時代の遺物を含む焼土層や溝跡を検出したため、発掘調査を指導した。また洛陽女子高校東側の敷地（右京二条三坊一町跡）では、二回の試掘調査を実施した結果、古墳時代とみられる溝跡や、平安時代の遺物を含む南北流路跡、掘立柱建物跡などを検出したことから、発掘調査を指導した。

そのほか、西大路七条交差点近くの右京七条二坊十二町跡では、西市跡に關係するとみられる遺物包含層を検出し、発掘調査の指導を行った。

また、平安宮跡に近い右京三条二坊一町跡では、建物計画場所の大半が既存解体建物の基礎で既に遺構の大半が破壊されていたが、擾乱をあまり受けていない敷地西端部分から平安時代前期の遺物を伴う園池跡が見つかり、事業者の協力で試掘調査を延長して遺構の検出と実測を行った。

そのほかの現場からは、近世から近代にかけての墓地跡や、小規模な遺構・遺物を検出した場所もあったが、いづれも試掘調査段階で終了している。また遺構を検出した場所であっても設計変更により遺構を保存し、工事着工させた場所もある。

洛北地区 北野庵寺3・史跡仁和寺境内1・元稻荷窟跡1・北山ノ前窟跡1・植物園北遺跡2の合計8件の試掘調査を実施した。

京都市内最古の瓦を焼いたことで知られる元稻荷窟跡の隣接地では、工房跡とみられる掘立柱建物の跡が見つかったが、一部遺構保存が可能なため、国庫補助事業による発掘調査を指導した。

北白川地区 最勝寺跡1・小倉町別当町遺跡1・北白川庵寺1の3件の試掘調査を実施した。

六勝寺の一寺院である最勝寺跡に推定される京都会館東隣の公園建設整備予定地では、平安時代後期の瓦溜めを検出し、多数の軒先瓦が出土した。

洛東地区 中臣遺跡4・山科本願寺跡及び左義長町遺跡1の5件の試掘調査を実施したが、有力な遺構は検出していない。

中臣遺跡では1件、堅穴住居跡・土壙などを検出したが、設計変更で遺跡の保存を図った。

伏見・醍醐地区 伏見城跡2件の試掘調査を行ったが、重要遺構は検出していない。

鳥羽地区 この地区では鳥羽離宮跡14、下鳥羽遺跡1の15件の試掘調査を行った。

鳥羽離宮跡では地業跡や、離宮以後の中世集落跡のはか、古墳時代の遺物包含層などを検出したが、いずれも設計変更で遺構保存の指導を行った。

南・桂地区 福西古墳群2・櫻原廃寺跡1の3件の試掘調査を実施した。

福西古墳群では目立った成果はなかったが、櫻原廃寺跡では地質調査を主眼にした活断層調査に伴う試掘調査を実施し、断層は確認されなかったものの、中世期の柱穴や土壙を多数検出した。

長岡京地区 長岡京跡4（うち淀城跡1）・羽束東志水町遺跡1の計5件の試掘調査を行った。

長岡京跡では有力な遺構は検出されなかったが、淀城跡からは本丸跡の北側で石垣を検出し、また瓦も出土したため、試掘調査を延長して遺構検出及び実測を行った。

3.まとめ

以上のとおり、平成8年は埋蔵文化財包蔵地を78件、史跡指定地3件の試掘調査を実施し、そのうち発掘調査を8件、遺跡保存を前提にした設計変更6件を指導した。

一方、市域内で行われた発掘調査で特に成果のあったものは、平安宮内酒殿跡で初めて大型の井戸跡が見つかり、井戸の掘形から「内酒殿 夫貳人料飯□□人別四斗 弘仁元年(810)十月十八日 山作 大舍人□□□」と墨書きされた木簡が出土し、宮域復元に重要な成果を提供した。また立会調査では、朝堂院暉章堂跡の基壇石（凝灰岩）が見つかっている。

平安京左京の八条院町では、中世の漆器や箸が大量に出土し、また右京域の朱雀第四小学校では、右京の変遷を知る上で貴重な「まじない遺構」が多数見つかった。その他の京域の調査現場からも、条坊に伴う御溝や宅地の区画遺構などが検出されている。

北区西賀茂の平安京の瓦を焼いた上ノ庄田瓦窯跡からは、工房跡や瓦が大量に入った溝跡が検出された。また、左京区岩倉幡枝町で行った試掘調査で、飛鳥・白鳳時代の工房跡と考えられた遺構は、発掘調査の結果、中世から近世にかけての土師器窯跡や工房跡であることが判明した。そのほかJR花園駅前の法金剛院跡では、園池跡、地業跡、東門跡などの遺構が見つかっている。

西京区の仄方古墳群では、道路拡幅工事で法面から横穴式石室が2基発見され、発掘調査を指導したが、うち1基が近くの京都市立大原野小学校校庭に移築保存された。

北野廃寺跡では、遺跡北域の推定伽藍中軸線に近い場所から、竈を伴う奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡ほか、数棟の建物跡が検出され、北野廃寺伽藍復元に重要な成果となった。

（梶川 敏夫）

Ⅱ 平安宮主水司跡 No.2

1. 調査経過

試掘調査を行ったのは京都市上京区丸太町通日暮西入西院町747-53で、丸太町通りと智恵光院通りの交差点を北へ20mほど上った東側の敷地(293m²)である。

当該地では、既存の木造家屋から一階建築面積93m²の鉄骨3階建て個人住宅に建て替える工事計画が持ち上がったため、事前に、遺構の残存状況確認を目的とした試掘調査を平成8年3月25日に実施した。

当該地付近は、既往の調査結果から、平安宮中務省の東隣にあって、宫廷生活にかけがえのない水を掌る「主水司」の推定場所に当たり、今回の敷地は、主水司の四方を囲む築地の東北角か、または築地東・北辺が検出される可能性のある場所である。

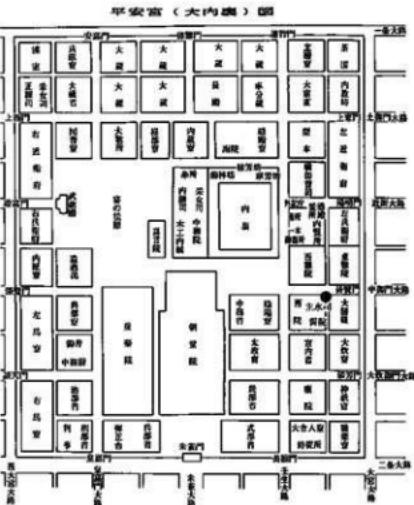


図2 平安宮復原図と調査位置

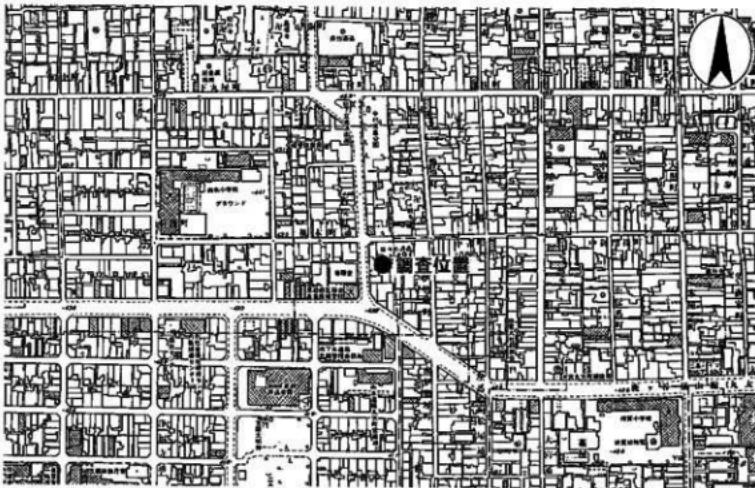


図3 調査位置図 (1:5,000)

2. 遺構

計画建物は小規模な工事であることから、基礎工事で掘削される場所（3.2m×3.2mの穴3箇所）と、さらに土止め工事が行われる北側溝地境界付近を対象にして試掘調査を行った。

掘削の結果、建築基礎が入る場所の大半は、後世の擾乱が著しく、江戸から幕末ころの遺物のほか、近・現代の遺物も含まれていた。

しかし、工事場所の中央付近、地表下40cmと極めて浅いところから、遺物を含まない褐色粘質土を南北約3mほど検出し、それが南北の築地状の高まりとなって残存していた。

この高まり部分の中央上面には、江戸時代の遺物（塙壺ほか）を含む南北溝が掘られていた。また、この築地状遺構の東西幅は、積み土とみられる褐色粘質土層が断面形状「かまはこ形」に幅4mほどあり、またその東側から、幅1.8m、深さ20cm程の深い南北溝跡を検出した。

この深い溝跡の底近くからは、平安時代の土師器などの遺物や、木炭灰などが出土している。

築地状の高まりと溝については、今回の調査が基礎掘削範囲のみが対象であり、さらに検出場所以外の周囲は、後世の擾乱があって、遺構がどのように続くかは不明であるが、地形からしてさらに南へは延びていくようである。

この築地状の高まりの北側（敷地境界に沿って）では、規模や範囲は不明ながら落ち込み状の遺物包含層があって、中から木炭灰や平安時代の土師器を主体とした遺物が出土した。

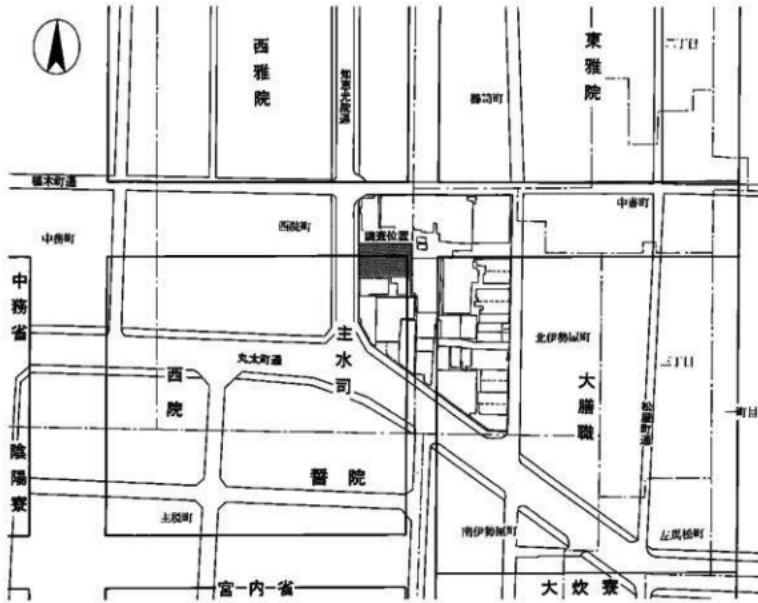


図4 平安宮官衙の推定範囲と調査位置 (1:2,000)

3. 遺物

出土遺物は、ほとんどが敷地北側の落ち込み状の遺物包含層から出土した。

遺物の種類は、土師器（高杯・椀・皿・杯身・杯蓋・黑色土器ほか）、須恵器（壺・蓋・椀など）、瓦（丸・平瓦）など、遺物ケースでほぼ2箱分を取り上げた。

そのほか、築地状遺構上面で検出した南北溝跡からは、江戸時代の塩壺や陶磁器の小破片のほか貝殻なども若干量出土している。

遺物は圧倒的に土師器が多く、楕・壺・杯(身・蓋)・高杯・黒色土器など、ヘラ削りやヘラ磨きを施した小型の食器類が多い。1~3の杯は、直径13~20cmほどのもので、外面は不鮮明ながらヘラ削り調整が認められる。4~7は正面は宝珠つまみを中心表面にヘラ磨きを施している。10~11は使用しており、脚部の7面の面取り仕上げも極めて均等である。

このほか土師器には、ヘラ削りで調整した皿の破片も多く、他に黒色土器も少量出土している。須恵器は8の杯蓋や、9の長頸壺のほか、小型壺の口縁や壺底部の破片などがある。遺瓦はいずれも丸・平瓦の破片で、形状のよく整った平安時代前期の丸瓦玉縁などがある。遺物包含層から出土したこれらの平安時代に属する土器類には、灰釉陶器や綠釉陶器は含まれず、器種は碗・皿・杯及び蓋・高杯・黒色土器など供膳用の土器が殆どで、煮炊き用の土器は出土していない。

いずれの出土遺物も平安時代を5期に編年した「I期中・新」の時期に当たるとみられ、9世紀初頭前後に使用されていたものを、一括して投棄されたものとみられる。

4. まとめ

主水司は「もいとりのつかさ」といい、宮中の生活に必要な飲料水や、供御の水を貯蔵した水

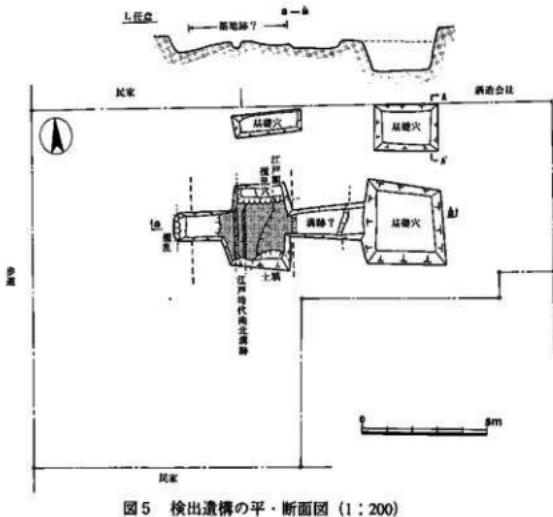


図5 検出遺構の平・断面図（1:200）



図6 土壙断面図(東壁)(1:40)

室に関する事、またその行事を掌る役所で、宮内省大膳職の西にあったとされる。

また、同じこの官衙内には、南に薬院（宮内省大膳職が取り扱う薬・未薬などの調味料を主に保管する）があったとされ、この逆に、北が薬院で、南が主水司とする平安宮図もある。

昭和47・48年に行われた丸太町通り南の上下水道局管理地内の調査¹¹で、「薬」と墨書きされた須恵器杯身（9世紀初頭）が出土していることから、今回の調査でも南が薬院とし、北側を從前どおり主水司跡として調査を行った。

また、昭和52年6月に智恵光院通丸太町下る西で行われた主水司東辺の調査¹²でも、不明なが

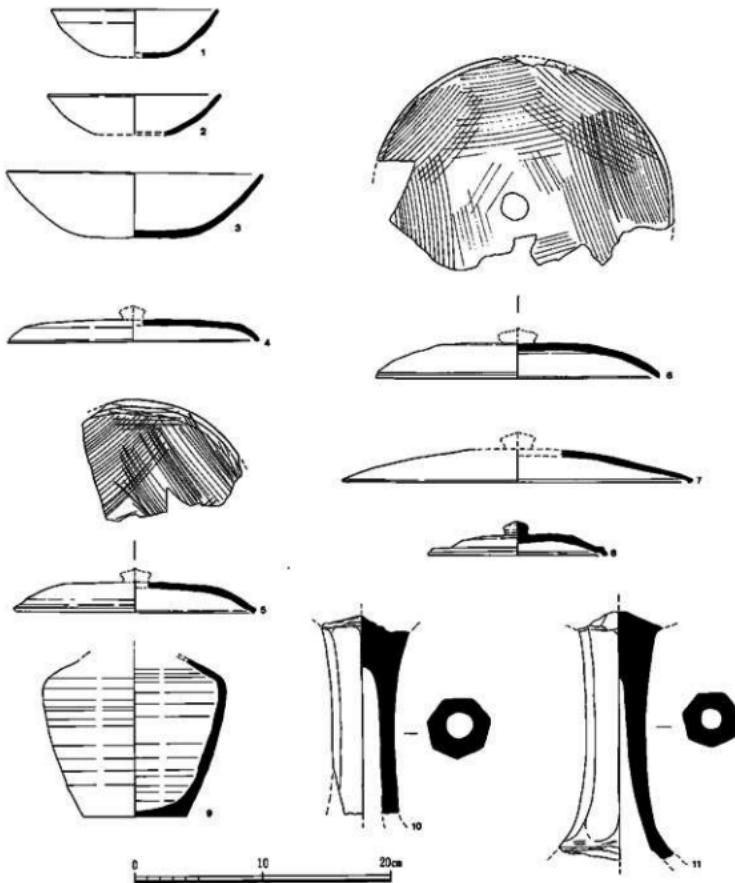


図7 出土遺物実測図 (1:4)

ら南北方向の溝状遺構が検出され、この遺構は築地内側の溝跡と予想されており、今回の検出した築地状の高まり及び溝跡との関連が注目される。

今回の調査は、敷地内で主水司の東限か北限の築地、またはそのコーナー部分が検出される可能性があるという予測のもとに試掘調査に臨んだが、調査場所は小規模な限られた範囲内で、しかも工事区の大半が搅乱という悪条件であり、十分な遺構検出や範囲確認もできなかった。

今回検出した築地状の高まりは、南北で3m・東西4m程度しかなく、遺構上面や南・北及び東・西両側も江戸時代から近・現代の搅乱があって部分的な調査で終了せざるを得なかつた。

一方、敷地北側では土器を含む包含層を検出し、その中から土器や瓦が遺物ケースで2箱程度出土したことは誠に幸運であった。これらの遺物包含層が、敷地の北側部分に存在するということは、言い換えると南北方向の築地状の高まりが西へ折れ、主水司の北辺築地外側（または内側）にあった溝に一括して投棄された土器群とも考えられ、検出した築地状の高まりが主水司の築地とすれば、この敷地内かあるいはこのすぐ北側で西へ曲がっていたことになる。

（梶川 敏夫）

註

- 1) 山田邦和「平安宮主水司・薬院跡出土の土器・陶器」『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告 第4輯、(財)古代學協会・古代學研究所、平成6年12月
- 2) 本町八郎ほか「平安宮主水司跡」『平安京跡発掘調査概報』1977、(財)京都市埋蔵文化財研究所編、昭和53年3月



写真1 検出した築地状の高まり（中央）と南北溝跡（左下）（北東から）

III 平安京右京三条二坊一町跡 No.40

1. 調査経過

調査地は、平安宮跡に近い二条通御前下る西側の2,300m²を越す東西に長い敷地である。過去に鉄骨造の建物が存在していたこともあり、遺構の残存状態は悪いと考えられた。そこで調査では、旧建物による搅乱の規模と遺構の残存状態を確認する目的で、敷地内に5箇所のトレンチを設定した(図10)。トレンチによる確認調査の結果、敷地の南西隅部分を除いて遺構の残存状態は極めて悪かった。残る南西隅部分では園池状の遺構が認められたので、拡張後精査を行った。この精査から、当地に9世紀後葉から10世紀前葉にかけて埋没したと考えられる園池跡の存在を明らかにすることができた。

調査期間は平成8年6月21日、同年7月2日から5日の計5日間であり、調査面積は205m²である。

2. 遺構

層序 池跡部分の東側断面の堆積状況をみていくと、パラス、造成土、旧耕作土と続く。旧耕作土下の地表下約40cmで、中世の遺物を含む褐色砂泥層が存在する。この下層に平安時代の遺物包含層である黄灰色砂泥層が厚さ10~15cmで広がり、池跡の陸部・池部を通じて全面を覆っている。陸部では黄灰色砂泥層の下部に黒褐色粘質土層が、池部では埋土として上からオリーブ黑色砂泥、黒色砂泥、黒色粘質土と続く。これら埋土の内、黒色砂泥中に最も多くの遺物が含まれていた。

また、池の基底層を構成する土層は上から、

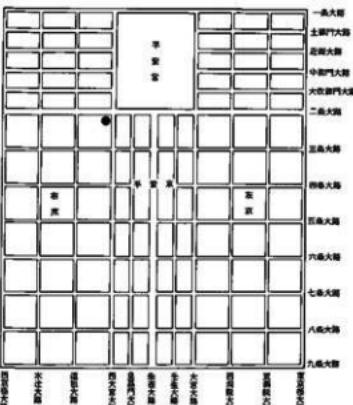


図8 平安京条坊区(調査位置)



図9 調査位置図 (1:5,000)

微砂を含む黒色砂泥、微砂を多く含む褐灰色砂泥、締まりのある浅黄色微砂、締まりのある褐灰色微砂、褐灰色砂層と続く。これらの層は水平堆積を示し、締まりも強いことから、作庭時に整地された可能性も考えられる。

池跡 南に緩やかに落ち込み、2段の段差が認められる。調査区内での池上面から池底までの

深さは最大で45cmを測り、拡張区東北部分の一段目の落ちの部分では玉石の痕跡と考えられる小石を6個確認することができた。また、調査区南西部分に比高差は約15cmしかないものの島状の張り出しあり認められた。池の埋土からは、綠釉陶器、灰釉陶器、土師器高杯・皿、輸入陶磁器等が多数出土した。池跡及びこの造構面全てを覆っている黄灰色砂泥層にも多くの遺物を含み、年代も池跡埋土と差がないことから、比較的短期間に埋没・整地が行われたと考えられる。

S X 1 南北95cm、東西66cmの不整円形の土壤であり、最大深度は9cmである。景石の抜き取り穴の可能性もある。

柱穴 2 捜索82cm、柱当たり40cm、造構面からの深さ31cmを測る。

柱穴 3 円形の捜索で直径は42~50cmである。

3. 1次調査出土遺物

6月21日に回収した遺物で、図化（図13）した資料は全て3トレンチから出土したものである。大半は池跡埋土のものと考えられるが、出土層位に曖昧なものもあり、次章以下の遺物とは分離して記述する。

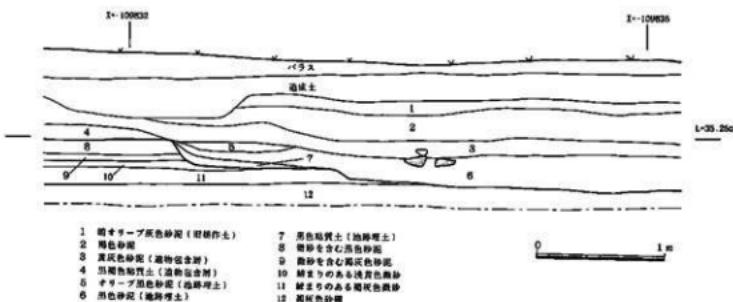


図11 拡張区東壁断面図 (1:40)

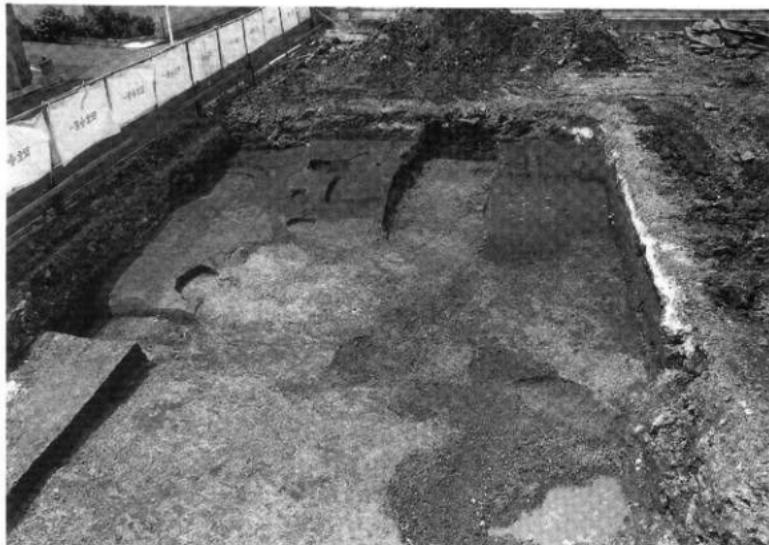


写真2 拡張区全景（南から）

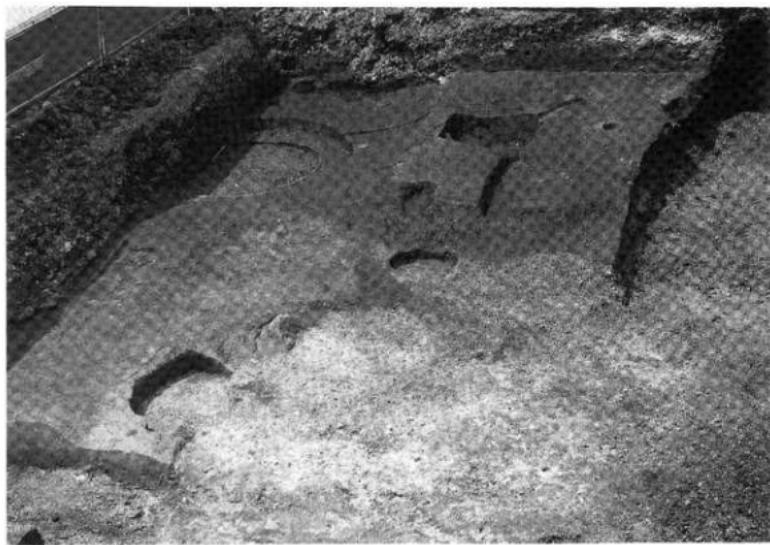


写真3 池跡近景（南東から）



図12 遺構実測図 (1:100)

土師器 小壺 (1) は、底部の切り離しが回転糸切りで、内面には明瞭な輪廻痕が残る。高杯の杯部 (2) は開きが浅く、口縁部は外反して端部は上方に立ち上がる。高杯脚部 (3~5) は七角形ないし八角形に面取りされ、上方向のヘラ削りが施される。裾部はナデの後、粗いハケ目が残る。脚部上面(受け都底部)は器壁が非常に薄く、平たい。

須恵器 鉢 (6) は、内湾ぎみに立ち上がる体部に、玉縁状の厚い口縁が取り付く。

縁釉陶器 底部の切り離し及び高台の形状から、5類に大別できる。1類の回転糸切り未調整

の小椀（7）は、底部を除きオリーブ灰色の釉薬が掛かる。2類の削り出し円盤状高台の皿（10）は、軟質焼成の素地に、オリーブ灰色に釉薬が発色している。3類の蛇の目高台をもつ皿（8・9）は、灰白色と浅黄色の軸調を呈する。主体を占める削り出し輪高台をもつ個体（4類）には、椀（11・12）と皿（13～18）がある。椀はいずれも削り出しが浅いため、底部と接地面との差がわずかである。椀（12）の外底面には「！」状のヘラ記号がある。削り出し輪高台の皿（16と18を除いて）は内湾ぎみの底部をもち、器壁が比較的薄く、高台部分を深く削り出している。皿13は内底面に陰刻花文が施されている。皿（16）と（18）は外底面の削りが浅く、底部の器壁は8mmを越える。皿（18）を除き、輪高台の径は8.6cmから9.4cmの間に収まる。

貼り付け輪高台（5類）の椀（19）は高台径が15.6cmの大椀で、内湾ぎみの底部は接地する。

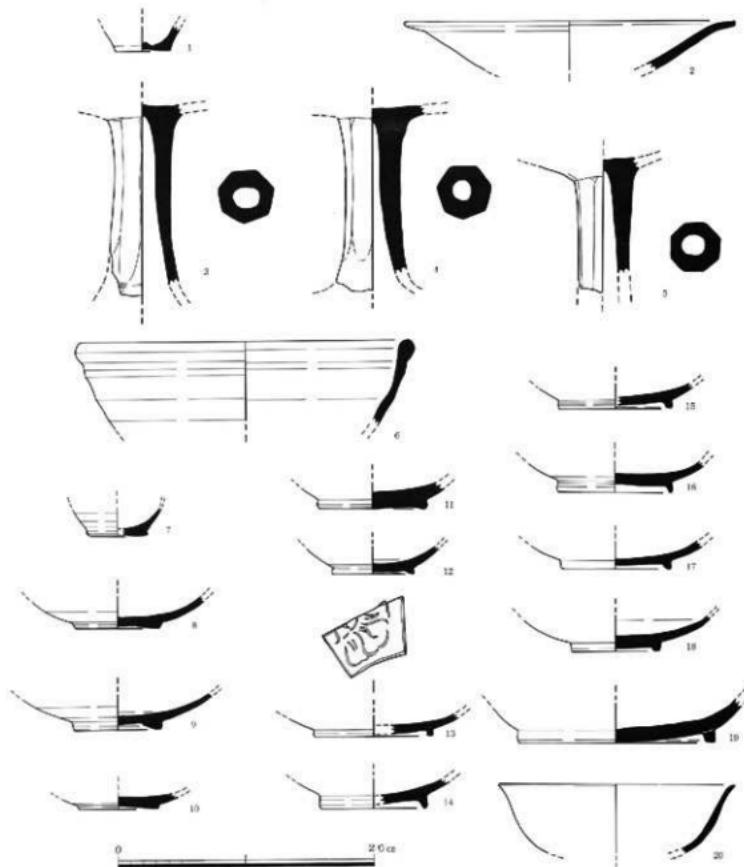


図13 1次調査出土土器実測図 (1:4)

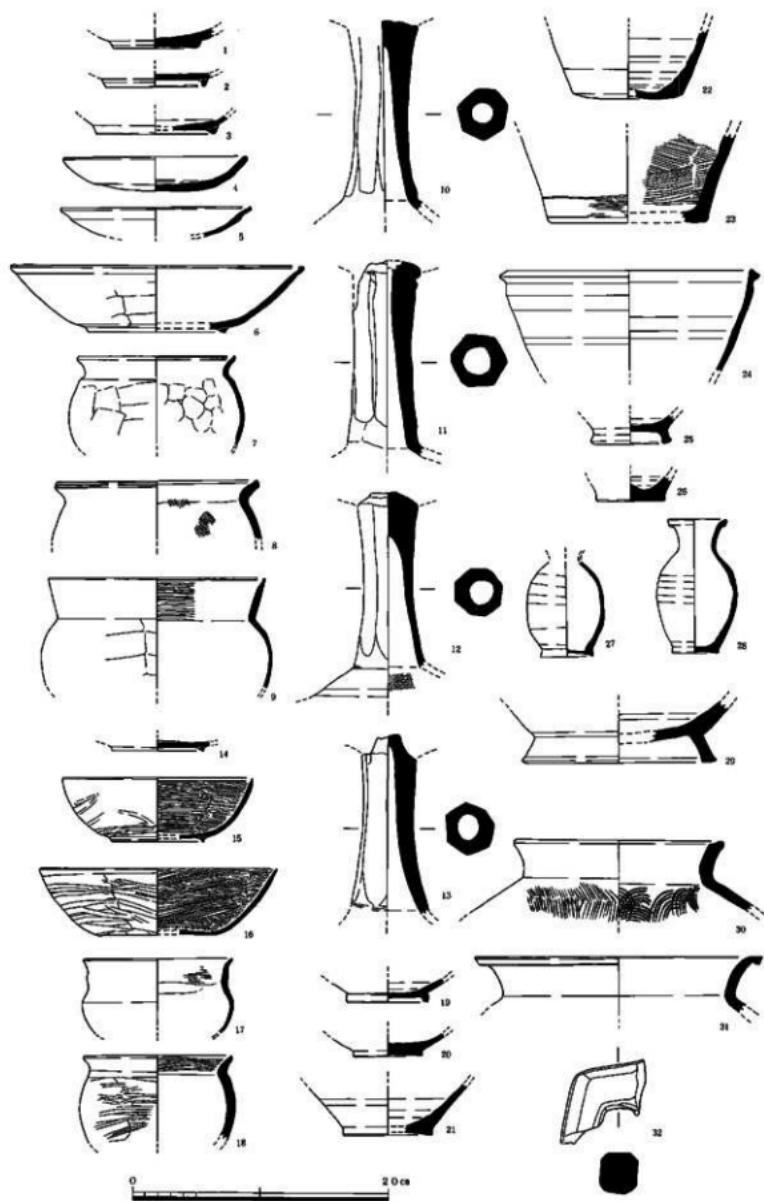


図14 2次調査出土土器実測図1 (1:4)

図22 瓦ぬき部分の断面図(実物)

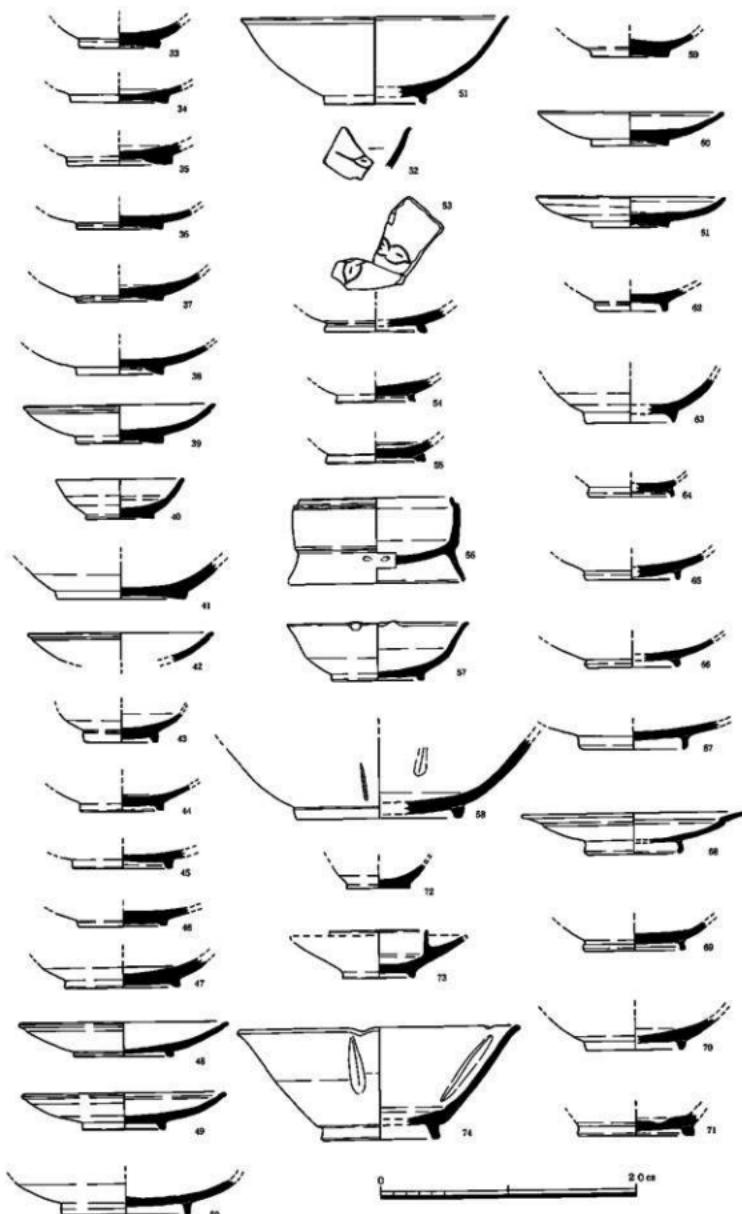


図15 2次調査出土土器実測図2 (1:4)



写真4 池跡汀ライン（東から）

器壁は12mmと厚い。椀（20）は深く内湾した体部をもち、端部は緩やかに外反する。

これらの遺物は9世紀中頃から10世紀前半のものを中心とする。

4. 遺物包含層出土遺物
池跡及び陸部全体を覆う平安時代の遺物包含層から出土した資料である。図化（図14・図15）した資料には、土師器高杯、須恵器（無釉陶器）椀・火舎、縁付陶器椀・皿、灰釉陶器椀など

がある。

土師器 高杯の脚部（10）は7角形に面取りし、上方向にヘラ削りが施されている。杯部とは、ソケット状に突き出す脚部上部を差し込んで接合している。

須恵器（無釉陶器） 削り出し輪高台の椀（19）、回転糸切りの皿（20）、火舎（29）がある。椀（19）の削り出しが深く、高台は断面方形を呈する。火舎（29）は長い方形の高台が底部と体部の境界に斜方向に貼り付けられている。この高台は壺の可能性もある。

縁付陶器 前項に従って、高台の形態を分類した。3類の蛇の目高台をもつ椀（35）の底部は内湾し、内底面に一条の沈線が巡る。4類の削り出し輪高台の皿（46）は削りは浅く、底部の器壁は1cmに達する。貼り付け輪高台（5類）の輪花椀（58）は全面施釉の優品で、外面のヘラ切りによる輪花は深く鋭い。内面は輪花部分で棒状に盛り上がる。最後の形態に、貼り付けのいわゆる「近江系」とされる有段輪高台（6類）をもつ椀（55）がある。池跡埋土から出土した椀（54）もこの層から購入したものと考えられる。両者とも軟質陶器に施釉され、底部は厚く、高台は低く短い。他に口縁部資料として皿（42）と椀（52）がある。皿（42）の特徴は口縁下部に鋭い凹線が巡ることである。これは池跡埋土出土の皿（39）と同系統の製品と考えられる。一方、椀（52）は口縁部内面に陰刻花文をもち、端部は短く外反する。

灰釉陶器 椭（39）は、退化した三日月状の貼り付け高台をもつ。

5. 池跡埋土出土遺物

今回の調査で出土した資料の主体を占める遺物群（図14・図15）である。

土師器皿（4・5） 皿（4）は厚手の器壁が緩やかに内湾し、幅の広いナデ潤製が施されている。皿（5）は「て」字状口縁に近い形態をもつ。図化可能なものはこの1点だけであったが、

破片数は資料中で最も多い。

土師器杯 (2・3・6) 低い断面三角形の高台に、浅く開く側壁をもつ形態である。全体の形状を分析できる杯 (6) では、体部は直線的に浅く開き、口縁部を強くて外反気に立ち上げ、さらに口唇部を内側に折り曲げている。外面体部全体をヘラ削りしている。

土師器椀 (1) 軟質焼成の縁釉陶器の素地の可能性もある、円盤状高台の椀である。

土師器高杯 (11~13) 杯部との接合形態から2種類に大別できる。高杯 (11) では、脚部は面取りされ、上方向の削り調整が施されている。脚部上方が丸く膨らみ、そこに粘土帯を貼り付けて杯部を成形するものである。一方、高杯 (12)・(13) に代表される一群は、ソケット状の上端部をもち、これを杯部に挿入している。そのため、上端部の器壁は、高杯 (11) のグループに比較して厚い。脚部の調整技法は高杯 (11) と同じである。

土師器甕 (7~9) 口唇部内面に段や沈線が巡る。体部外面はヘラ削りを基本とするが、口縁部内面をヘラ磨きする一群もある。口縁部の形態や傾きは多様である。

黒色土器椀 (14~16) 高台の有無から2種類に大別できる。有高台の (14)・(15) は、断面三角形の扁平な高台を貼り付け、深く内輪する体部をもつ。口唇部に段をもち、内面は密にヘラ磨きが施されるが、外面の磨きは粗く高台近くに集中する。無高台の椀 (16) は、平底状の広い底部に直線的に立ち上がる体部をもつ。口唇部は強くナデられたため、器壁は薄い。内面は密な磨きが施されるが、外面は前段階のヘラ削り調製の痕跡を確認できる粗い磨きが施される。

黒色土器甕 (17~18) 口縁部は外反し上方に進むにつれて薄くなる。体部外面にヘラ削りの後、粗いヘラ磨きを施す。口縁部内面の調製はハケまたは横方向の磨きである。

須恵器鉢 (21~24) (23) は内面にハケ調製が認められるが、それ以外は、輪轂の痕跡が明瞭に残る体部をもつ。鉢 (24) は鋭く外方に突き出す断面三角形の口唇部をもつ。

須恵器小壺 (25~28) 外方に踏ん張る輪高台をもつ (25) と、平高台の (26~28) に大別できる。小壺 (27)・(28) は、薄い底部から輪轂の残る釣り鐘形の体部に続き、口縁部は面取りされ、下方に若干垂下している。

須恵器甕 (30~31) 口縁部の器壁が厚く、口唇部上方を強くナデた (30) の一群と、口唇部を外方に屈曲させ、端部を面取りした (31) の一群に分類できる。甕 (30) の一群は口縁部との境界付近まで明瞭な叩き調製が施されている。

須恵器把手 (32) 断面方形の把手は平瓶のものと考えられる。

縁釉陶器皿 蛇の目高台 (3類) をもつ皿 (33・34・36~39) は、器壁の薄い (34) を除き高台径が7cm附近に集中している。口唇部のわかる皿 (39) は一条の凹線を口唇部下部にもつ。削り出し輪高台 (4類) をもつ皿は、削りが浅く底部の厚い (44・46・47) と、削り出しの深い (45・48・49) の2系統が存在する。全形の分かる皿 (48)・(49) では体部が直線的に開いた後、口縁部が内上方に緩く屈曲し、端部は内側に膨らむ。口唇部直下は鋭く窪む。

縁釉陶器椀 円盤状高台 (2類) の小椀 (40) は、側壁中程で内方に屈曲する。3類である蛇の目高台の椀 (33) は体部が緩やかに立ち上がる。4類の削り出し輪高台の椀 (43・51・53・57)

は多様な形態をもつ。椀（53）は内底面に陰刻花文が施されている。椀（57）は稜椀であり、口唇部に輪花をもつ。

縁釉陶器香炉（56） 口縁部は受け口状に短く立ち上がり、肩部に凹線が一条巡る。底部は内湾し、薄い外反高台が体部と底部の境界部分に付く。この高台は端部が面取りされ、2個一対の穿孔装飾が施されている。全面施釉の優品である。

無釉陶器皿 円盤状高台の皿（59）と、蛇の目高台の皿（60・61）がある。蛇の目高台の皿は浅く聞く体部に内湾する口縁部をもち、端部は内側に肥厚し、口唇部直下に沈線が巡る。

灰釉陶器皿 典型的な三日月高台の皿（65・67・68）と、退化した三日月高台の皿（66）がある。皿（68）は高い三日月高台に薄い体部をもつ段皿で、屈曲部の圈線は明瞭である。

灰釉陶器椀 方形（62）、三角（63）、退化した三日月形（64・70）のものがあり、全面施釉のものはない。体部の立ち上がりは椀（62）を除き、深い内湾する。

灰釉陶器壺（71） 底部糸切りの体部に方形の低いがっしりした高台が取り付く。

白色土器小碗（72） 明灰褐色の色調をもつ椀で、底部は回転糸切り未調整である。

青磁托（73） 越州窯系の青磁で、熱湯を注いで作られた茶を入れた椀の台器としての機能をもつ。オリーブ灰色の釉薬が全体に施釉されている。

白磁輪花椀（74） 灰白色の五輪花椀で、指頭による輪花とヘラ押しによる輪花がある。高台部分は釉薬が施されていない。見込み部分に幅広の凹線が一条巡る。

6.まとめ

当該地に直接想定される邸宅は文献上不明である。しかし、右京三条二坊には、9世紀前半には明法博士譲岐朝臣永直（譲岐国人）の居住が、9世紀中頃には弓削連是雄（河内国人）の居住が想定されていることから、彼らの作庭の可能性も考えられる。

池跡埋土出土の縁釉陶器は削り出し輪高台を主体に、蛇の目高台のものが加わる。稜椀の存在が認められる一方、円盤状高台のものも若干残っている。灰釉陶器では典型的な三日月高台のものと、やや退化した三日月高台のものが含まれる。さらに土師器皿や黒色土器の形態からも、時期的に平安京Ⅱ期中からⅡ新（9世紀後半から10世紀初め頃）を主体としており、この頃、池跡は埋没したと考えられる。この池跡全体を覆う平安時代遺物包含層の資料は、「近江系」縁釉陶器が加わることを除けば、池跡埋土の遺物と多くが重なるため、埋没後すぐにこの包含層による大規模な整地が行われた可能性もある。

この池跡資料で注目する点は、器種組成は京城の平均的様相から大きくはずれることはないが、出土例の少ない青磁托や、大振りの白磁輪花椀が出土し、縁釉陶器の比率が高いことである。

（馬瀬 智光）

謝辞

土器資料の解釈や縁年表については小森俊克氏の御教示を得た。

IV 平安京右京四条二坊十二町跡 No.43

1. 調査経過

調査地は、京都市右京区西院東淳和院町5-4に所在する青空駐車場で、西大路四条(西院)交差点の北東に位置する。この青空駐車場を立体駐車場に変えることになり、平成8年9月18日に試掘調査を行った。

当地は平安京の条坊復原によると右京四条二坊十二町の北東隅に位置し、敷地の北及び東半部が錦小路と西堀川小路にそれぞれ該当する。また、この付近一帯は淳和院の推定地でもあり、十二町の地を東南隅として東西二町・南北4町あるいは方二町の広大な範囲が宮苑として想定されている。さらに、中世末期に造られた城壁、御土居の推定範囲でもあり、推定では当該敷地を南北に縱断する。

駐車場として使用しながらの調査であったため、東西方向に4箇所の小トレンチを設けて機械掘削を行い、遺構検出を行った。

2. 遺構・遺物

1・2・4トレンチ いづれも層序は同じで、地表下約0.5mまでが盛土、その下層は砂礫による河川氾濫堆積で1トレンチでは地表下1m以上、2トレンチでは0.9mまで、4トレンチでは1m以上あることを確認した。1・2トレンチの砂礫層内からは平安時代の磨耗した須恵器片や瓦片が若干量出土した。

3トレンチ トレンチの東端は河川氾濫の影響を受けているが、それ以外は他のトレンチとは様相が異なり盛土下の地表下0.6mで平安時代前期の遺物包含層である黒褐色泥砂が約10cmの

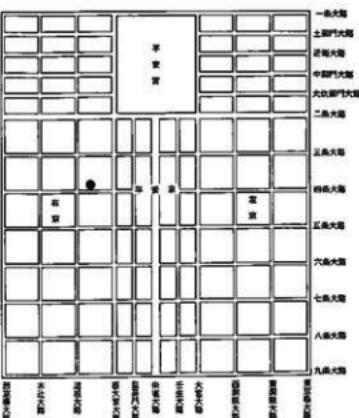


図16 平安京条坊図（調査位置）



図17 調査位置図 (1:5,000)

厚さで堆積し、その下で南北方向の溝を検出した。

南北溝は東西幅3.4m、深さは0.2mと広くて浅く、断面形は逆台形を呈している。溝内からは平安時代前期の土器・瓦類が出土し、埋土には焼土・炭が多量に混ざっていた。溝内から出土した遺物は小破片が多く、掲載したのは複弁八井蓮華軒丸瓦だけである。瓦はやや小ぶりの中房に1+6の蓮子を配する。蓮弁はやや細長く、独立した弁間文を飾る。外区の珠文は小さく、疎らに16個を並べ外縁には鋸歯文を飾る。瓦当厚は約4cmと分厚く、胎土は精良、焼成は硬い。平城宮式6308型式の系統と考えられる。

3.まとめ

既往の調査から西堀川小路には、その中央に西堀川が流れ、平安時代中期以後では川の流れが激しくなり砂礫が堆積するようになったことが分かっている。

1・2トレンチで検出した砂礫は、西堀川の氾濫堆積と推定でき、調査地東側の南北道路の立会調査でも流路を確認していることから当該地周辺では西堀川小路自体が流路と化していたようである。

3トレンチで発見した南北溝は位置的に西堀川小路西築地の内溝に推定でき、埋土に含まれる焼土・炭は貞觀16年(874)4月19日の淳和院火災に伴うものと考えられる。

また、4トレンチで確認した砂礫の堆積は、調査範囲が狭いため確証は得られないが御土居の外堀の可能性もある。

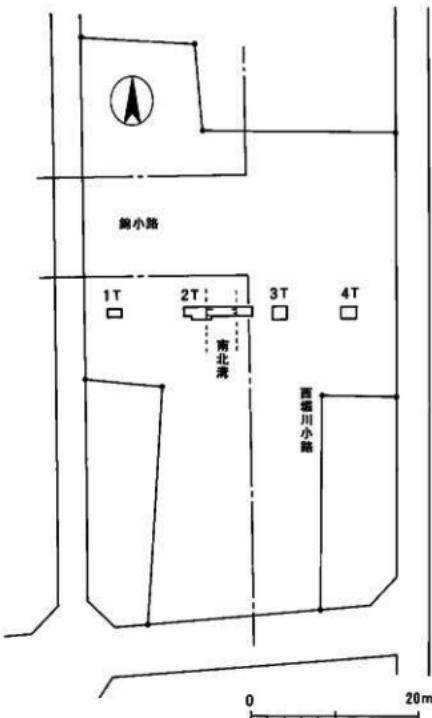


図18 トレンチ位置図 (1:600)

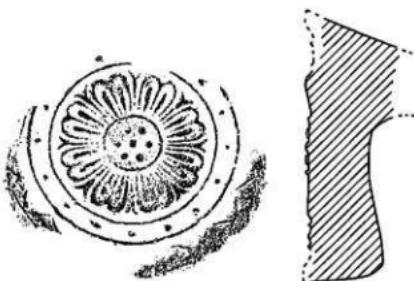


図19 軒丸瓦拓影及び実測図 (1:3)

(長谷川 行季)

V 最勝寺跡 No.11

1. 調査経過

試掘調査場所は、京都市左京区岡崎最勝寺町95の岡崎公園整備計画地で、京都会館の東隣に当たり以前は公営駐車場があった所である。

当該地は、院政時代に造営された六勝寺の一寺院「最勝寺跡」に比定される場所で、京都市都市計画局緑化推進部緑地建設課は、岡崎公園整備事業の一環で公園整備を計画した。

公園整備工事は、直接遺構を破壊するものではないが、排水施設工事や出入口部分など、部分的な掘削工事箇所もあるため、平成8年1月10日・22日の2日間、遺構の残存状況確認を目的に、掘削機械を使って10箇所の小規模なトレンチを設け、試掘調査を行った。

2. 遺構・遺物

平成8年1月10日は、公園南入口を除く公園敷地全体に8箇所のトレンチを設け掘削を行った。調査結果、敷地中央のやや北寄りの所から瓦溜めが見つかり、平安時代後期の遺瓦が出土した。

さらに、公園南入口整備工事箇所が若干の掘削工事を伴うため、そこを対象に1月22日に試掘調査を行った。ここは既往の調査結果から推定二条大路の北限（最勝寺南限）に近いと推定される場所であったが、粉碎した凝灰岩が平面上に広がっているのを発見した程度で、有力な遺構は

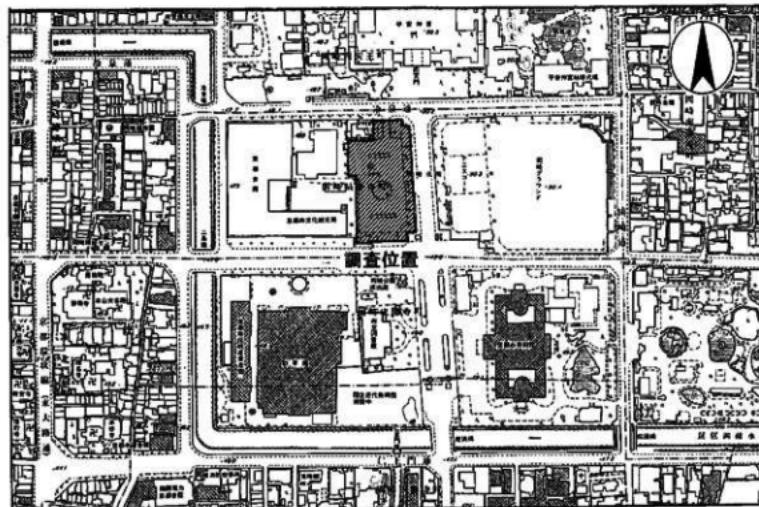


図20 調査位置図 (1:5,000)

検出できなかった。

瓦溜めから出土した遺瓦は、軒先瓦のみ3箱分程度を取り上げた。

いずれも山城・播磨産などの瓦で、既往の調査で出土している平安時代後期のものであり、最勝寺の建物に葺かれていた瓦と考えられる。

4.まとめ

鳥羽天皇の御願寺で、元永元年(1118)12月に落慶供養が行われ、塔三基と金堂・五大堂・薬師堂などの主要建物があった。最勝寺跡推定地からは最近、神宮道や冷泉通りで行われた埋設管工事で、西限やその他の遺構が確認されている。

今回の調査では最勝寺跡に関する有力な遺構は検出されなかつたが、瓦溜めと、寺域南限に近いとみられる凝灰岩を含む土層面を確認したことから、公園内は堂宇跡が良好に残存する確率が高いと考えられる。

(梶川 敏夫)

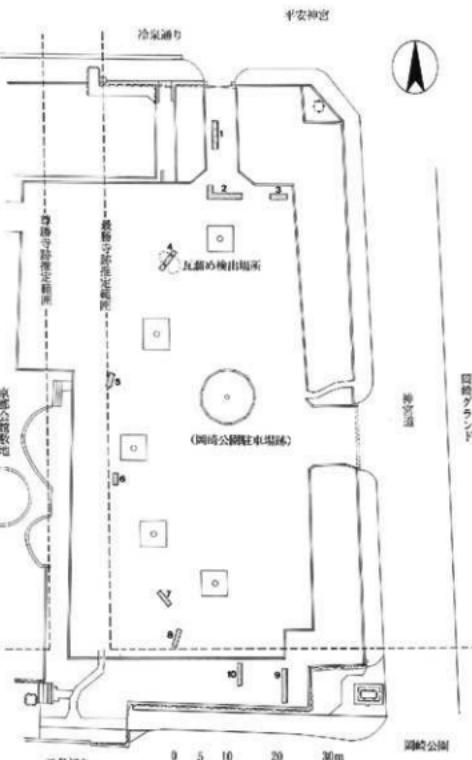


図21 最勝寺跡推定範囲とトレンチ位置図 (1:1,000)

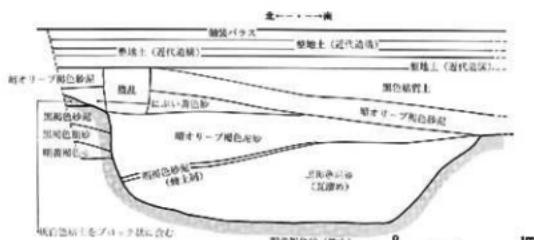


図22 瓦溜部分の断面図(東壁) (1:40)



写真5 瓦溜部分(北西から)

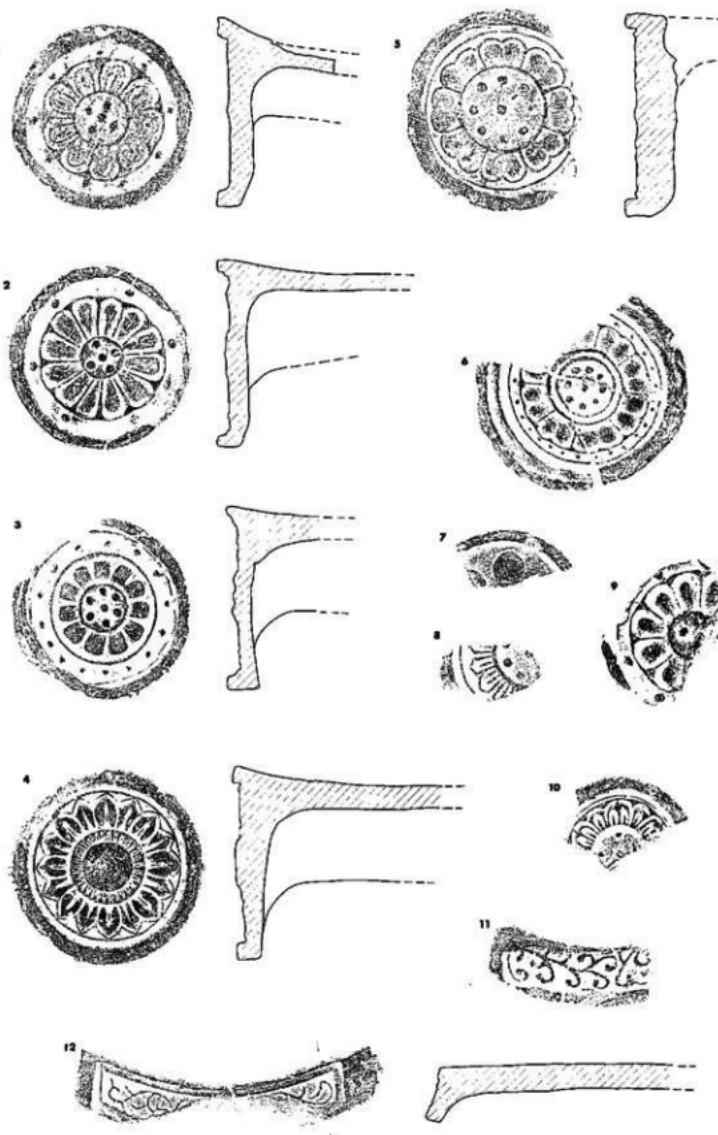


图23 出土陶瓦拓影及び実測図 (1:4)

IV 桜原廃寺跡 No.77

1. 調査経過

今回の試掘調査は、活断層調査に先だって埋蔵文化財の残存状況掌握のために実施した。

平成7年1月17日の「阪神・淡路大震災」では、京都西山断層群の一つである「桜原断層」が動いたとみられる被害が、桜原一帯を含む長岡丘陵東麓周辺に多く発生した。

京都市消防局防災対策室防災課は、科学技術庁の協力を得て、かつての航空写真や地形図などから活断層の位置を選定し、機械掘りによる土層断面観察を主体とした活断層調査を計画した。

選定された場所は、周知の遺跡である桜原廃寺跡に当たることから、センターは文化財保護法第57条の3による通知書の提出を求め、また事前協議を行って、重要遺構が存在する可能性のある場所や、保存が確実視される場所を避けた位置に、調査区を設けるよう指導を行った。

その結果、史跡桜原廃寺跡公園（廃寺跡主要伽藍の南半）に隣接した北東外の土地（京都市西京区桜原内垣外町11,11-1）が選ばれ、事前にセンター指導による試掘調査を実施したものである。

調査場所は、廃寺のある東下がりの台地上より、東に一段（約1.5m）下った畠地で、ここは昭和56年1月21日～2月4日にかけて、（財）京都市埋蔵文化財研究所が小規模な遺跡確認調査を実施した場所の隣接地で、かつての調査結果からは重要遺構が検出される確率が低い場所である。

前回の調査区を外した位置にトレチを設定し、活断層調査に先行して試掘調査を行った。

調査は平成8年12月4日から開始し、同月13日までには遺構検出、実測を終えて埋蔵文化財の



図24 調査位置図 (1:5,000)

調査を完了し、現場を引き上げた。なお、活断層調査はそれ以後年末まで実施された。

2. 遺構

櫻原廃寺跡は、南北に延びる長岡丘陵の東側裾部分の丘陵台地（標高35～38m）に存在した7世紀中頃に創建されたとみられる仏教寺院で、付近一帯で昭和42年に行われた開発に伴って発掘調査が実施され、やや東下がりの地形から、瓦積み基壇八角塔を中心に、中門跡や築地跡が検出されている。

沿革や寺院名が不詳のため、地名をとって「櫻原廃寺跡」と呼ば

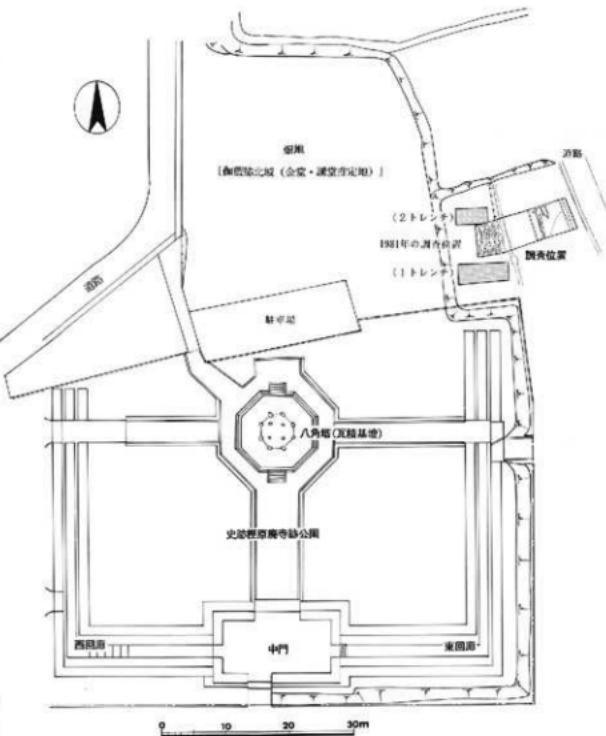


図25 櫻原廃寺跡公園と調査位置図 (1:800)

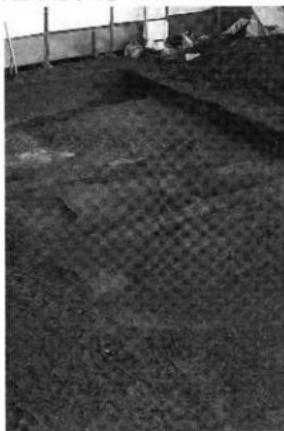


写真6 東調査区の土堤状造構
(上方) (西北から)

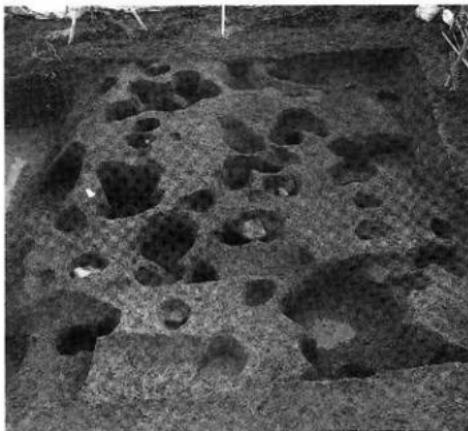


写真7 西調査区の中世の柱穴 (北から)

れ、八角塔跡を含む主要伽藍南北半が史跡指定されて現在は史跡公園として整備されている。なお、塔のすぐ北側には、まだ畠地の平坦地が存在し、ここには金堂または講堂などの主要建物跡が存在するものと考えられている。

調査場所は、東側築地の北延長線上から東に当り、地域の貸し農園として利用されている土地で、標高は33.3m余り、調査区西寄りに50cm程の段差があって、段下に南北の浅い溝がある。

調査規模は、東西15m×南北5mの75m²で、表土は機械で排除し、人力で遺構検出を行った。調査区については、平坦な中央区、やや低い東区、50cm程高い西区の3区に分けて説明する。

中央区 耕作土を除くと、直下にチョコレート色の粘質土（暗褐色粘質土）が存在し、それ以下の土層には遺物包含層を確認できないことから、その面で一時期の遺構面が存在する可能性を考えて精査したが、柱穴などの遺構や遺物は殆ど確認されず、一時期の地山と判断した。

東区 全体に東下がりの地形で、中央区で検出した地山上面とみられる暗褐色粘質土が消滅し、東端には段差があって急に落ち込むことが判明（落ち込みの東側は調査区外で不明）した。

落ち込む手前には、南北の等高線に沿って礫を主体にした土堤状の高まりが存在し、廃寺の割れ瓦や礫を使って、土がぎり落ちないように土堤と法面が構築されていた。

土堤状遺構からは瓦に混じって中世期の瓦器や羽釜の破片が出土し、寺が廃絶した後、付近の開墾が進む時点（鎌倉から室町）に築かれたものと考えられる。そのほか有力な遺構はない。

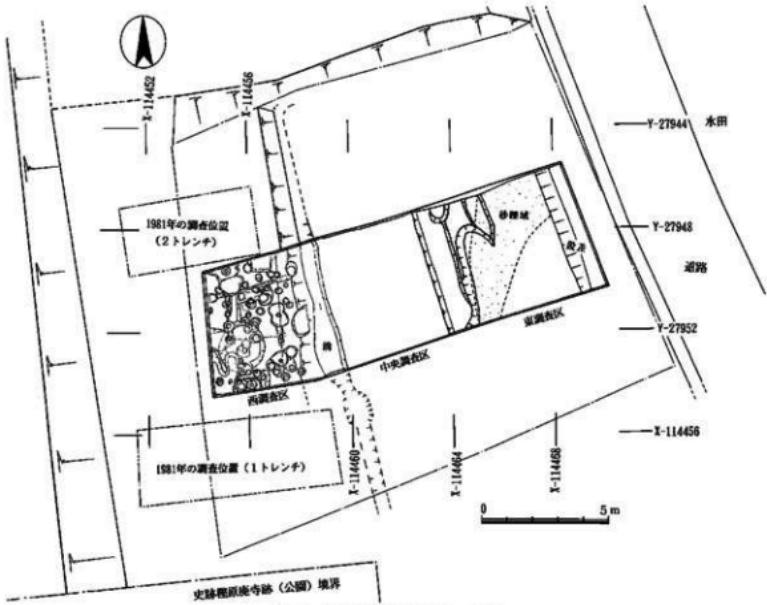


図26 検出遺構実測図 (1:200)

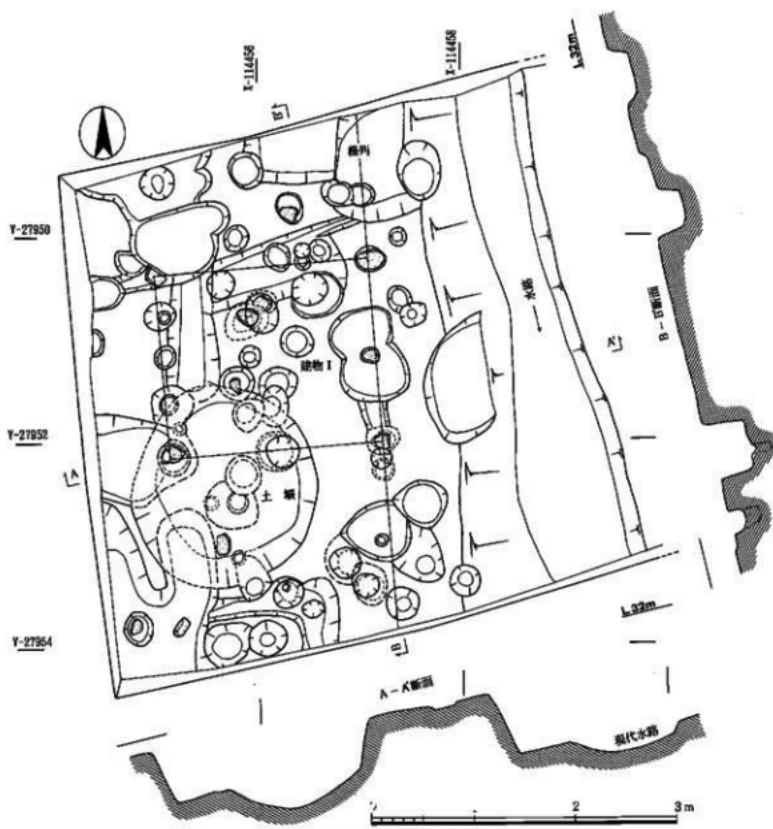


図27 西調査区検出遺構実測図 (1:50)

西区 調査区の西側、東西5m程の一段高い部分で、多数の柱穴や土壙を検出した。

中には最近の耕作で掘られた穴も存在するが、鎌倉から室町期頃の羽釜片や土師器の細片が出
土し、昭和56年の調査で検出されているピットと同時期のものと考えられる。

以上、今回の調査で確認したものは、西区で検出した多数の柱穴と、東区で見つけた南北の土堤状遺構のみで、いずれも中世期とみられ、櫻原廢寺に関係する遺構は確認できなかった。

3. 遺 物

出土遺物は、遺瓦が圧倒的に多く、丸・平瓦がコンテナに4箱以上出土した。また土器類では、縄文陶器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などの破片が遺物ケースで3箱ほど出土している。

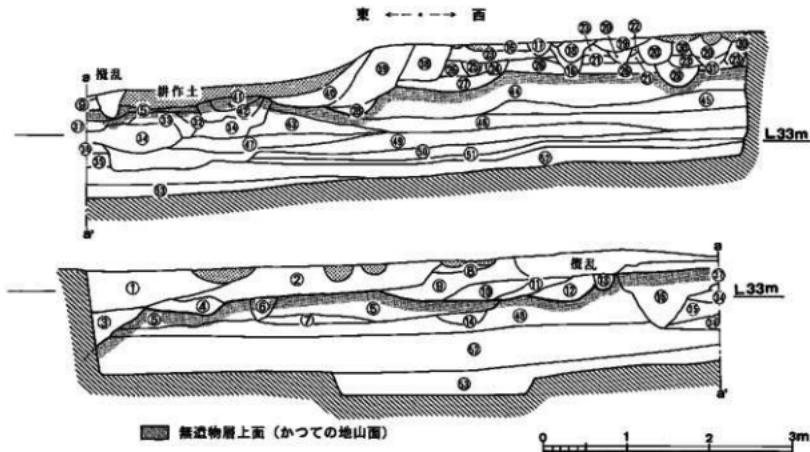
出土遺物の殆どは、調査区の東端部分で検出した南北の土堤状遺構から出土し、また、一段高い西側地区で検出した掘立柱の柱穴とみられる穴からも、少量の土師器細片が出土している。

瓦 瓦は殆どが東端の土堤状遺構の中から出土、大半は丸・平瓦で破片が多く、元の大きさ

に復元できるものはない。その中で創建期とみられる瓦は、セット関係とみられる単弁八弁蓮華紋鏡瓦(1)と素紋字瓦(3・4)があり、西調査区から唯一1点出土した(3)の頸部には、2本の平行沈線が施されている。そのほか軟質の三重孤文字瓦(5)や、時代のやや下る複弁八弁蓮華紋鏡瓦(2)とみられる破片、平安時代とみられる字瓦の破片も出土している。

平瓦は桶巻き作りで、外曲面に網目状の亭叩き圧痕を有するもの(6・7)、外曲面を搔き落したような平行圧痕を持つものなど、創建期から奈良時代にかけての瓦のほかに、縄目亭叩き圧痕をもつ平安時代とみられる平瓦(9)もある。なお、出土瓦は既往調査で出土したものと大差はない。

土器類 緑釉陶器・土器師・瓦器椀・長脚の羽釜・陶器器などが、主に東調査区の土堤状遺構から出土した。緑釉陶器の小破片(10)は、東端の土堤状遺構の中から瓦に混じて唯一1点出土し、平安時代中期頃までのものとみられる。また灰釉のかかった山茶碗風の椀底部の破片(11)のほか、最も破片が多く出土した瓦器椀(12)は、西調査区の掘立柱建物に伴う遺物とみられ、底部がかなり退化した鎌倉から室町期頃のもので、羽釜の破片も僅かに出土している。



1 褐色土（田耕作土）	2 底質褐色泥砂	3 暗灰色砂礫（須恵器片を含む）	4 黄灰色泥砂
5 底質褐色泥砂（小石を含む、土器の肩部？）	6 暗灰色泥砂	7 にぶい黄褐色砂	
8 暗灰色砂泥	9 黒褐色砂泥（土器片含む）	10 暗灰色泥砂（土器片含む）	11 灰オリーブ砂泥
12 暗褐色砂泥	13 暗灰色泥砂	14 明黄褐色砂	15 底質褐色砂泥
15 にぶい黄褐色泥砂	17 明黄褐色泥砂	18 にぶい黄褐色泥砂	19 黄褐色泥砂
20 暗灰褐色泥砂	21 にぶい黄褐色泥砂	22 明黄褐色泥砂	23 にぶい黄褐色砂泥
24 浅黄色砂泥	25 黑褐色泥砂	26 明黄褐色砂泥	27 明黄褐色砂泥
28 黄褐色砂	29 にぶい褐色泥砂	30 底質褐色泥砂	31 暗灰色泥砂
32 底質褐色砂	33 暗灰色シルト	34 暗褐色砂砾	35 暗褐色泥砂
36 明黄褐色粗砂	37 にぶい黄褐色シルト	38 黄褐色泥砂	39 暗灰褐色砂質土
40 底質褐色泥砂風化	41 底質褐色土	42 底質褐色風化土	43 にぶい黄褐色粗砂
44 底質褐色砂泥（埋没）	45 黄褐色砂	46 にぶい黄褐色砂	46 黄褐色シルト
47 明黄褐色シルト	48 黄褐色砂	48 にぶい黄褐色砂泥	50 にぶい黄褐色シルト
51 底質褐色シルト砂砾	52 黄褐色シルト	53 にぶい黄褐色砂泥	

図28 調査区南壁断面実測図 (1:60)

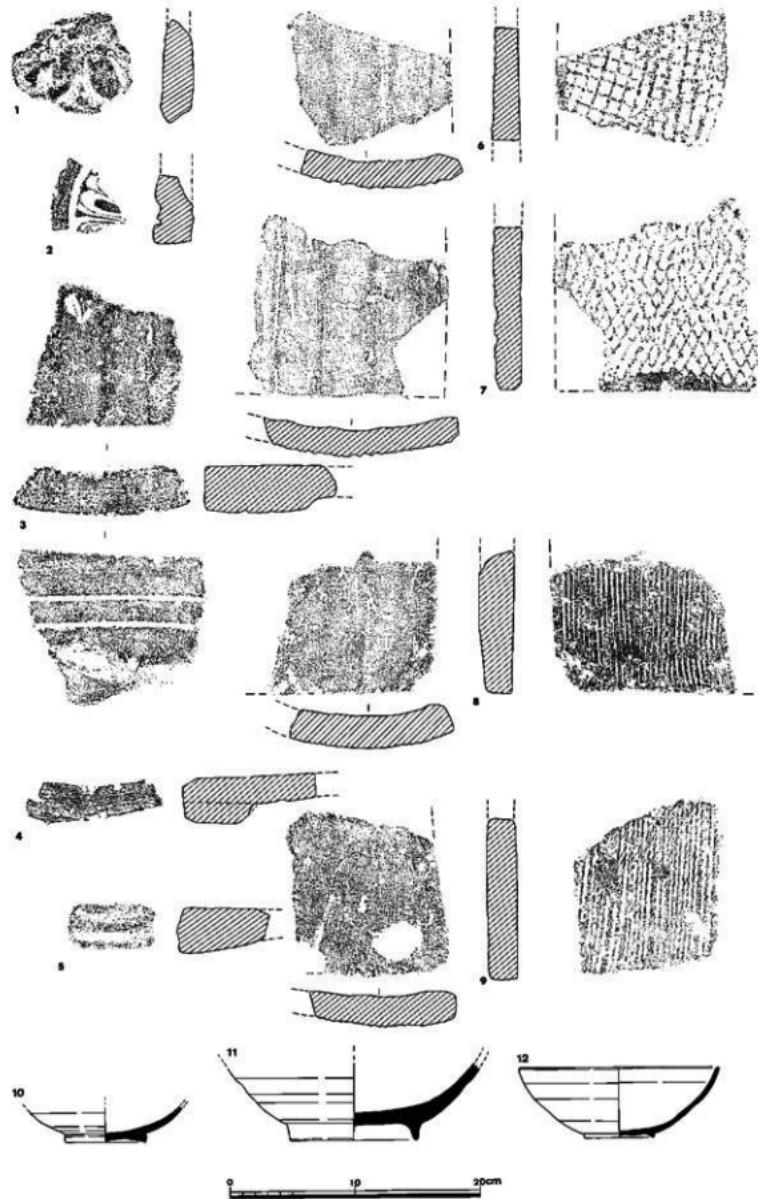


図29 出土遺物の拓影及び実測図 (1:4)

4.まとめ

今回の調査では、昭和56年の発掘調査と同様、廃寺跡に関する遺構は検出できなかった。

西調査区の耕作土直下からは、中世期の柱穴を多数検出したが、近代の土壤も重複して存在し、遺構はかなり複雑な状況を呈している。いずれも簡素な掘立小屋（建物Ⅰ）か柵列程度の遺構で、復元は困難であるが、何回かにわたって建て直されたものとみられる。

今回の調査場所は、廃寺東限を限る築地の北への延長部分で、当然、築地の基底部または、伽藍外側の遺構が検出されてもよい場所である。しかし、調査地は伽藍が存在した台地を東北側から切り込むように一段低くなっている。西調査区の高い位置から上記の中世期とみられる多数の柱穴を検出したことから、当該地は中世に入って、付近の開墾が進み、かつて寺院のあった台地を削り、切り取った平坦地部分には簡易な建物を設け、一方、低い東側には土堤を築いて傾斜地を平坦にし、耕作地化された可能性が高い。

なお、今回の主目的である活断層調査については、下層断面観察の結果、当該調査区からは活断层面は検出されなかつたとされ、段差部分に住む地域住民には安堵すべき調査結果となった。

（梶川 敏夫）

参考文献

註

- 1) 佐藤興治『櫻原廃寺発掘調査概要』1967、京都府教育委員会
- 2) 『史跡櫻原廃寺跡』京都市文化財保護課編、昭和47年3月
- 3) 平尾政幸『櫻原廃寺発掘調査概要』昭和55年度、(財)京都市埋蔵文化財研究所、昭和56年3月、
京都市埋蔵文化財調査センター編

調査協力 (株)ダイヤコンサルタント

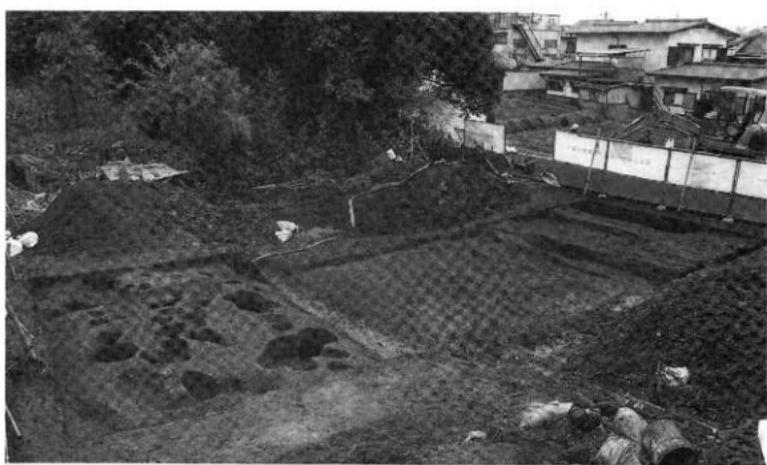


写真8 調査区完掘状況（南西から）

VII 淀城跡 No.21

1. 調査経過

調査地は、現在の淀城跡公園の北側に隣接する東西に長い敷地（図30）であり、淀城の本丸と二の丸との境界部分に想定されている。

この淀城は元和9年（1623）の伏見城破却に伴い、徳川二代将軍秀忠が山城警護を目的として松平定綱に築城させたもので、寛永2年（1625）に完成している。築城の際、伏見城天守を移建する予定が、その天守を二条城に移したため、天守台には慶長期創建の二条城天守が移されたとされている。一方、城主は松平定綱以後、享保8年（1723）の稻葉正知の入封まで、転封が繰り返されが、これ以後、廃藩まで稻葉氏の居城として使用された。現在では、城の天守台及び本丸部分の大部分は淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。しかし、周辺の市街化により、往時の姿を想像することは困難になっている。

このような歴史経過をもつ土地にマンションの建設設計画がなされたので、センターは平成8年2月7日から

同9日までの

3日間にわた

り調査を実施

した。その結

果、攪乱は多

いものの、數

地西端でL字

に屈曲する石

垣を検出し

た。幸いにも、

この石垣は開



図30 調査位置図

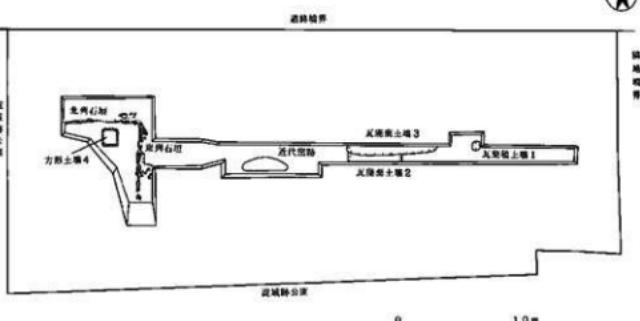


図31 トレンチ配置図 (1:400)



写真9 石垣検出状況（南西から）



写真10 北列石垣検出状況（東から）



写真11 石垣屈曲部近景（南から）

発側の協力による設計変更で、現地保存されることになった。調査面積は約129m²である。

2. 遺構

調査地は南の公園よりも約1m低い。この高低差を築城時の形態の反映とするのか、それとも廃藩後の改変の結果とするのかは、調査上の重要な課題であった。形状の変遷を理解するための南北方向のトレンチは設定できなかったが、計画建物の長軸に沿って東西方向のトレンチを設定した結果、現在の地表面よりも深いところで一部の遺構の掘形を確認した。そのため、削平の

可能性は残るもの、現地形はある程度築城期の高低差を反映していると考えられる。

瓦集積土壙 1 オリ
一ブ灰色粘質土の整地層に掘形をもつ直径70cm、深さ1mの円柱状土壙である。この土壙は底部から円形に瓦を並べて積み上げている。

瓦廃棄土壙 2・3
地表下55cmで検出された。淀城に使用されたと考えられる大量の瓦が廃棄されている。土壙2は長軸4m、深さは約1mを測り、土壙3によって切られている。

土壙3は長軸約7mで、最深部は調査区外に存在するため不明である。

方形土壙 4 石垣で囲まれた内部空間の整地層である明黄褐色粘質土を掘り込む、一辺1.2mの正方形の土壙である。検出面からの深さが約5cmと浅いため、本来はさらに上層から掘削さ

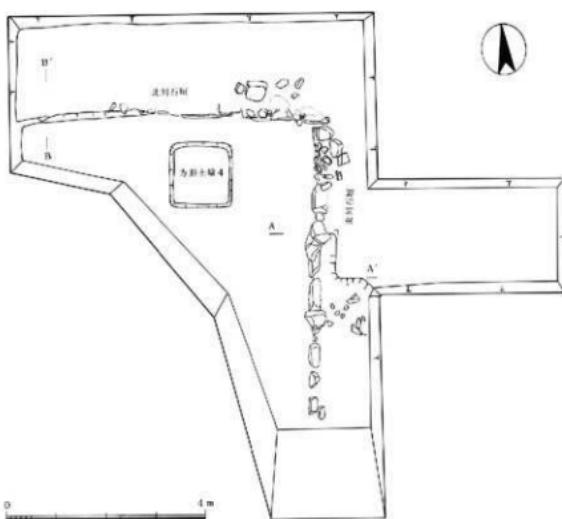
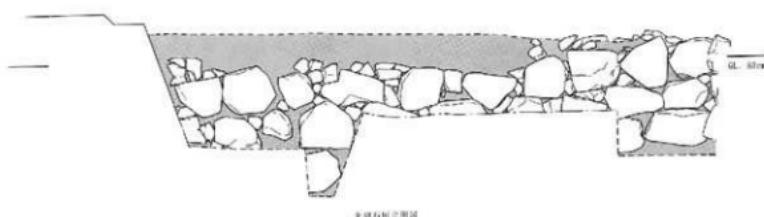


図32 検出遺構平面図 (1:100)



北側石垣立地面図

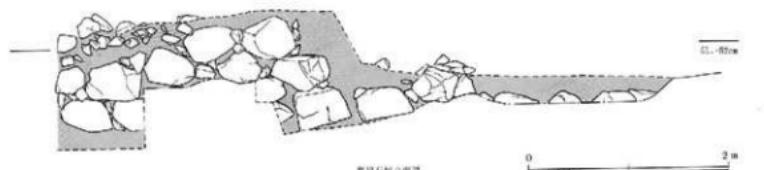


図33 検出石垣立面図



図34 検出石垣断面図 (1:40)

れたと考えられる。構築時期や機能を推定する遺物は出土しなかった。軸方向は石垣と同一である。

石垣 (図32~34・写真9~11) 東西方向に並び南面する北列石垣と、南北方向に並び西面する東列石垣がし字に接続している。石垣は残りの良い部分で3段存在するが、東列石垣の南半分は上部が削平され、最下段の石列のみ残存している。

石垣は、長軸40~60cmの花崗岩を積み上げるために石垣法面から後方へ約1.1mの幅でし字形に明黄褐色砂層を削り取り、黄褐色泥砂層を敷き詰めている。部分的な観察ではあるが、かい詰め石や粘土を最下層に數き詰める工法は採用されていないと考えられる。石垣に使用されている花崗岩は面を揃えられ、隙間に拳大の石を詰め込み補強している。石垣の裏込めは人頭大から拳大の礫の充填された灰オーリーブ粘質土を含む黄褐色砂である。法面方向に炭を少し含む暗褐色泥砂、暗灰黄色粘質土、明黄褐色粘質土を順に積み上げ、明黄褐色粘質土の上面を内部空間の整地面としている。

北列石垣 (図33・写真10) では東から4列目以降で天場が一段下がり、その高低差を薄い板状礫を積んで補っている。この部分の石垣最下段も同様に一段降下していることから、築造後の地盤沈下や本来4段積みであった西半部最上段が崩落し、その欠落を埋める目的で板状礫が積まれた可能性が考えられる。

石垣内部の空間はその後、瓦片を含むにぶい黄褐色泥砂等の堆積を経て、灰黄褐色泥砂を用いた石垣最上段に達する整地 (図34) によって、消滅した。さらに、瓦片を多く含む褐灰色泥砂による整地と、近代以後の盛り土による嵩上げで現在の地形になったと考えられる。

3. 遺 物

実測可能な遺物は軒丸瓦・軒平瓦に限られる。これらの瓦片は全て、にぶい黄褐色泥砂層から出土したものであり、石垣の機能が停止した時期に廃棄されたものと考えられる。

三巴文軒丸瓦 尾部から球形の頭部へ巻き込む方向を巴文の方向とすれば¹⁾、出土した全ての巴文は時計回りの右巻きである。圓線の有無から大きく2類に分類できる。

圓線の無い三巴文 (1・3・4・6) は瓦当部径が19cmを越える1、径16cm強の3・4、そして径が15cmに満たない6の3種類に細分が可能である。圓線を有するものに比べ周縁の幅は比較的広く、小型のものでも2cmある。珠文の数は一定しておらず、1から順番に14個、15個、14個、17個となる。巴文自体は6を除き、尾部の先端が線状に長く伸びる特徴をもつ。

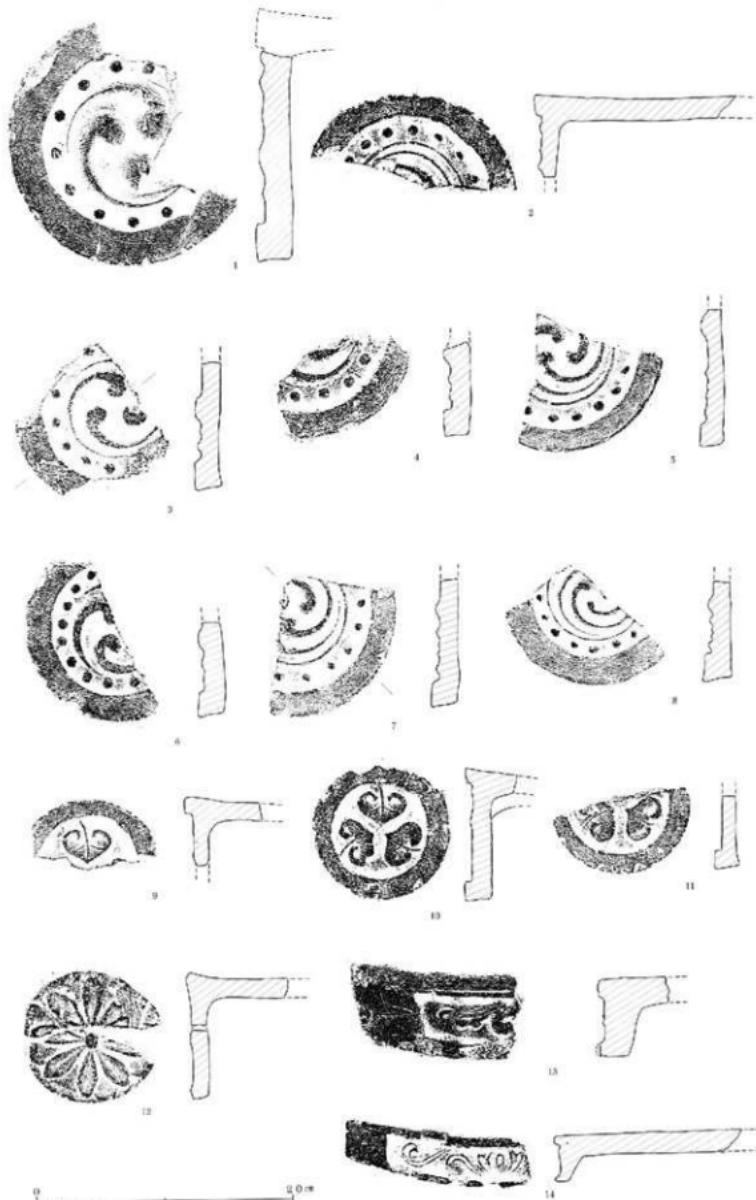


図35 出土瓦拓影及び実測図 (1:4)

圓線の有る三巴文（2，5，7，8）も瓦当部径から、17cmを越える2，径16cmの5・7，径14cm強の8の3種類に細分される。珠文は2から順に15個、16個、17個、17個となっており、一定していない。巴文は圓線の無いものと同様、尾部の先端が線状に長く伸びる特徴をもつ。

家紋瓦（三葉葵） 9から11の軒丸瓦は三葉葵の瓦当文様をもつ。葵文はハート形の葉を線状の中央脈が貫き、側脈がこの中央脈から放物線を描いて両側に伸びている。周縁の幅は1.2cmと大きく、瓦当部分の径は10.6cmと一定している。淀城天守台の発掘調査においても同文の軒丸瓦が出土しているが²⁾、正報告が未刊のため³⁾、詳細は不明である。

小菊丸瓦 12の軒丸瓦は菊花文のある瓦当径11cmの小型品である。菊花文は中央に小花心を置き、その周囲に8枚の花卉を配している。さらに内弁の先端部を結んで外弁が同じく8枚配されている。外弁は内弁に比べ彫りが浅く、磨滅している部分もある。周縁は存在しない。

軒平瓦 13は唐草文の主葉1転と、木葉状の子葉を認めることができる。側部周縁は5cmと幅広い。14の軒平瓦は中心飾りに3弁の花文を有し、そこから2反転の唐草主葉が伸びる。中心飾り及び唐草文は、輪郭部分のみ浮き彫りにしている。

4.まとめ

今回の調査から、淀城跡公園との高低差は築城当時から存在し、本丸と二ノ丸との境界の役割を果たしていたと推測できる。この石垣の築造及び破棄の時期に関しては、土師器等の年代決定に有効な資料が欠如しているために困難である。しかし、石垣の機能停止に伴う整地以前の堆積土である、にぶい黄褐色泥砂出土の軒平瓦13の木葉状の子葉を含む唐草文は、伏見城、大和郡山城、大阪城、四天王寺等から出土している⁴⁾。また、三葉葵を瓦當にもつ家紋瓦の出土は、徳川の政治戦略により松平家が築城した城郭である点からも⁵⁾、淀城築城に伴う瓦の搬入・製作された時点で構築された可能性を示唆している。また、石垣の内部空間に堆積した埋土中に残瓦が全く含まれないことから、江戸時代中期以後には既にその機能を終えていたとみられる。

このように、本丸以外の構造物の性格を解明する資料が断片的とはいえ明らかになったことは、今後の二ノ丸以下の機能の解明に役立つと考えられる。

(馬瀬 智光)

註

- 1) (財) 京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』1996年の第Ⅲ章のI.資料観察の基準(99~102頁)を参考にした。
- 2) 西川幸治編『淀の歴史と文化』1994年の図版32-2に同文の軒丸瓦の写真が掲載されている。
- 3) 里野歟二編『淀城跡調査概要Ⅰ』1987年
- 4) 山川均「郡山城出土の軒瓦について」『畿島城郭』第2号 1995年参照。
- 5) 西川幸治編『淀の歴史と文化』1994年の図版25の解説に天守にはことごとく徳川家の家紋である「三つ葉葵」が使用されていたとある。

表2 試掘調査一覧表

平成7年度 1~3月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
大藏主水司	上・中立光通千本東入丹波屋町348-1 上・丸太町通日暮西入上る西院町747-53	1/24 3/25	大半が複数で遺構などは発見出来ず。 GL-0.5mで平安時代前半の遺物包含層を発見。本文4頁	1 2

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
五条一坊四町	中・壬生辻町31	2/6	GL-1.0mで鎌倉時代の遺物包含層、その下層で同時代の土塁2・柱穴2を検出。発掘調査を指揮する。	3
朱雀大路	下・中堂寺坊城町44-3他	3/13	GL-1.15mで地山の明黄色砂泥、遺構は発見出来ず。	4
七条四坊五町	下・河原町通七条上る住吉町349-3他	2/2	GL-0.7mで鴨川の氾濫堆積。	5

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
一条三坊二町	中・西ノ京御奥町1-2	2/26	GL-0.5m以下、平安時代の遺物を含む焼土層を検出する。発掘調査を指揮する。	6
三条四坊二町	右・山ノ内御堂殿町13	1/29-4/3	GL-0.5mで平安時代?の柱穴2基を検出する。	7
九条四坊七町	右・吉祥院宮/西町33	3/4	GL-0.72m以下、桂川の氾濫堆積。	8

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北野魔寺跡	北・北野下白梅町55-3	2/13	GL-0.44mで地山の黄褐色砂泥、遺構は発見出来ず。	9
史跡仁和寺御所跡	右・御奈大内33	3/27	頗るな遺構・遺物共に発見出来ず。	10

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
最勝寺跡	左・岡崎最勝寺町 岡崎公園内	1/10-22	GL-0.57mで凝灰岩片を含む整地層、GL-0.78mで古墳時代遺物の包含層。本文21頁	11
小倉町別当町遺跡	左・北白川東小倉町39-1	3/21	GL-1.13m以下、平安~室町時代の遺物を含む整地層。	12

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中臣道跡	山・栗栖野打越町39-3	1/17	GL-0.8mで地山の褐色砂泥。遺構・遺物は発見出来ず。	13

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
伏見城跡	伏・桃山福島太夫町23他	2/19	GL-1.96mで時期不明の土壙状遺構・落ち込み状遺構。	14

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田洛菩提院町73	2/15	GL-1.86m以下で古墳時代の湿地状堆積。	15
鳥羽離宮跡	伏・竹田中宮町1-1	2/28	GL-0.3mで中世の東西溝・柱穴などを多数検出。設計変更を指導する。	16
鳥羽離宮跡	伏・中島御所ノ内町39-2	2/21	GL-1.0mで中世の整地層、GL-1.7mで灰色粘土、GL-2.1mで砂層。	17
鳥羽離宮跡	伏・中島中通町21-6他	3/6	GL-1m以下、池状堆積。	18
下鳥羽道跡	伏・下鳥羽芹川町21-1	1/31-2/1	GL-1.55m以下、河川氾濫堆積。	19

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
福西古墳群	西・大枝東長町1-127地	3/1	GL-2.5m以上の造成土を確認する。	20

長岡地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京跡・淀城跡	伏・淀本町173-10	2/7~2/9	「丁」字に曲がる石川を検出する。設計変更を指導する。本文31頁	21

平成8年度 4~12月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
大歳省	上・上長者町通千本東人五番町地	6/3	地表下1mまで近世の整地層。以下追山の砂礫層。	22
中和院	上・下立光通千本東人田中町422-1	5/15	GL-0.9m以下で中和院に隣接する整地層を検出。発掘調査を指導する。	23
真言院	上・下立光通千本西人経藍町440,441	9/11	GL-1.85mまで土取りによる削平。	24
中務省	上・竹園町通千本東人主祝町1124-3	5/20	GL-1.1mで平安時代の土壤状構造1基を検出する。	25
左馬寮	中・西ノ京左馬寮町9-6	7/15-9/4	表土以下で時期不明の東西溝。	26
朝堂院	上・千本竹園町下の主祝町1206	5/29	地表下2.26mまで近世の上取穴。	27
朝堂院	上・千本通竹園町下の主祝町806	8/7	混乱著しく、朝堂院跡・東築跡は発見出来ず。	28
朝堂院	上・竹園町通千本東人主祝町1185,1186	9/24	GL-1.2mで追山の砂礫層。直上まで近世の整地層。	29

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
二条四坊十町	中・丸太町通御車東入京都地方裁判所内	9/17-10/16	GL-0.8m以下、中世の整地層。設計変更を指導する。	30
五条三坊四町	下・西洞院高止下の西洞院町796-2地	5/27	GL-1.8mで追山の砂礫層直上まで近世から近代の整地層。	31
六条三坊一町	下・西洞院通遼原下の永倉町558,560	4/19	GL-1mで平安時代の井戸状遺構1基。	32
七条二坊二町 (史跡本願寺境内)	F・龜川通花街町下の西本願寺内	4/24	百草池の池底で中世の井戸跡2基。	33
八条二坊十四町	下・油小路通塙小路下の東油小路町553-4	4/17	GL-2.1mで平安から室町時代の遺物包含層。発掘調査を指導する。	34

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
二条二坊八町	中・西ノ京内町27-1地	4/22	近世の墓跡か?	35
二条二坊十二町	中・西ノ京中合町103	12/18	GL-0.5mで中世の遺物包含層、GL-0.8mで紙屋川の氾濫堆積。	36
二条三坊一町	中・西ノ京中御門町19	7/1-8/26	GL-1mで古墳時代の溝跡を検出。発掘調査を指導する。	37
二条三坊六町	中・西ノ京坂本町6	12/16	GL-0.6mの地山面で近代の小土礫を検出する。	38
二条四坊十三町	右・太秦安井御通町19-1地	4/8	遺構・遺物ともに発見出来ず。	39
三条二坊一町	中・西ノ京銅鏡町48,49,50	6/21-7/2-7/5	GL-0.5mで平安時代前期の園池跡を検出する。本文9頁	40
四条一坊八町	中・壬生天池町40	4/10	遺構・遺物ともに発見出来ず。	41
四条二坊八町	中・壬生上大町町13	11/20	GL-1.2mで推定三条大路内溝と柱穴群。発掘調査を指導する。	42
四条二坊十二町	右・西院東津和院町5-4地	9/18	地表下0.6mで確定西院川小路西墓地の内溝を発見。本文19頁	43
五条二坊四町	中・壬生橋町17-4,18-2,19-2,21-2	4/26	GL-0.7mで獨立柱遺物を検出。	44
六条一坊十六町	下・中意寺山内町24-3地	10/23	GL-1m以下、池状堆積。	45
六条二坊九町	右・西院高田町23-1,2	6/17	GL-0.6mで中世から近世にかけての東西溝。	46
七条二坊十町	下・西七条比輪田町4	7/29	GL-0.72m以下、流路堆積。	47

七条二坊十二町	下・北衣田町37-1他	10/28	GL-0.6mで平安時代前半の遺物包含層。発掘調査を指導する。	48
八条二坊十一町	下・七条御所ノ内中町50.53.55-3	8/19	GL-0.93mで平安時代の遺物包含層。	49
八条三坊十五町	右・西京極中沢町1-13他	8/14	地表下約1mで桂川の氾濫堆積。	50
九条一坊十二町 (史跡西寺跡)	南・唐橋西寺町68-3	12/11	GL-0.25mで平安時代の土器・瓦溜を検出する。	51
九条三坊十二町	南・吉祥院西ノ庄猪之馬場町1	8/9	GL-1.4m以下、湿地状堆積。	52
九条四坊八町	南・吉祥院宮ノ西町16	4/15	GL-1.6m以下、桂川の氾濫堆積。	53

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
元和荷窯跡	左・岩倉枝町730-6.730-4	5/22	灰原・土塘・柱穴等を発見。発掘調査を指導する。	54
大宮北山ノ前堀跡	北・大宮北山/前町4-1	6/14	GL-0.6mで中世の池跡。	55
植物園北遺跡	左・松ヶ崎芝本町1-1.9-2	6/12	遺構・遺物共に発見出来ず。	56
植物園北遺跡	北・上質茂高尾手町75.76	7/10	遺構・遺物共に発見出来ず。	57
北野庵寺跡	北・北野紅梅町85	9/19	GL-0.7mで平安時代の柱穴4基・溝状遺構2本を検出する。発掘調査を指導する。	58
北野庵寺跡	北・北野下白梅町27-1	12/9	GL-0.4mで中世の遺物包含層。	59

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北白川庵寺跡	左・北白川上別当町29.25	8/2	焼土を含む土層1基を検出。	60

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中臣遺跡	山・勤修寺西金ヶ崎246他	5/7	地表下1.15mで溝・上塙・窓穴住居跡を検出する。設計変更を指導する。	61
中臣遺跡	山・栗柄野打越町33他、東栗柄野町1-3	7/2	遺構・遺物ともに発見出来ず。	62
中臣遺跡	山・東野舞台町89-1	8/5	厚さ3m以上の造成を確認。	63
山科本願寺跡・左義長町遺跡	山・西野左義長町15-1他	8/23	GL-0.5mで焼土および中世～近世の土器・瓦を含む整地層。	64

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
伏見城跡	伏・横山町丹下1-1	7/17	座土のみ確認する。	65

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田真椿木町58-1	7/19	GL-0.75～0.9m以下で池状堆積。	66
鳥羽離宮跡	伏・竹田青池町	11/18	GL-1.05m以下、鴨川の氾濫堆積。	67
鳥羽離宮跡	伏・竹田内堀町68-1	5/17	耕土以下は疊層堆積。	68
鳥羽離宮跡	伏・竹田内堀町108-2	8/12	調査区全域が湿地状堆積。	69
鳥羽離宮跡	伏・竹田内堀町130-3	9/2	調査区全域が中世の湿地状堆積。	70
鳥羽離宮跡	伏・竹田淨善院町73-2・小屋ノ内町12他	5/13	GL-0.74mで石組み地盤を確認。設計変更を指導する。	71
鳥羽離宮跡	伏・竹田麗川町44,44-12	12/4	GL-0.5m以下、時期不明の流路跡を確認。	72
鳥羽離宮跡	伏・中島中道町26-1・中島麗川町54-3	5/9	GL-1.6～2.4mにかけて古墳時代の遺物包含層。	73
鳥羽離宮跡	伏・中島宮ノ後町1.2-1.2-2	6/19	GL-1.4m以下、灰色泥土。	74
鳥羽離宮跡	伏・中島宮ノ前町24-3	6/19	GL-1.74m以下、青灰色泥土。	75

ふりがな	さとうとしのいわましましつちよきめいゆう							
書名	京都市内道路試掘調査概報 平成8年度							
著者名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶川敏夫・長谷川行孝・馬齋智光							
編集機関	京都市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒606 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
櫻原城寺跡	京都府京都市西京区 櫻原内延外町	26100		34度 58分 4秒	135度 41分 38秒	1996/12/5~ 12/13	75	活断層調査 に伴う調査
淀城跡	京都府京都市伏見区 淀本町	26100		34度 54分 8秒	135度 43分 13秒	1996/2/7~ 2/9	129	マンション
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
櫻原城寺跡	寺院跡	奈良時代前期	中世期の獨立柱穴多数	軒瓦・平丸瓦・綠釉陶器・ 瓦器・陶器	活断層調査に伴う調査			
淀城跡	城跡	江戸時代	石垣	軒瓦	設計変更により保存措置を 図る。			

図 版

凡 例

平成 8 年試掘調査地点

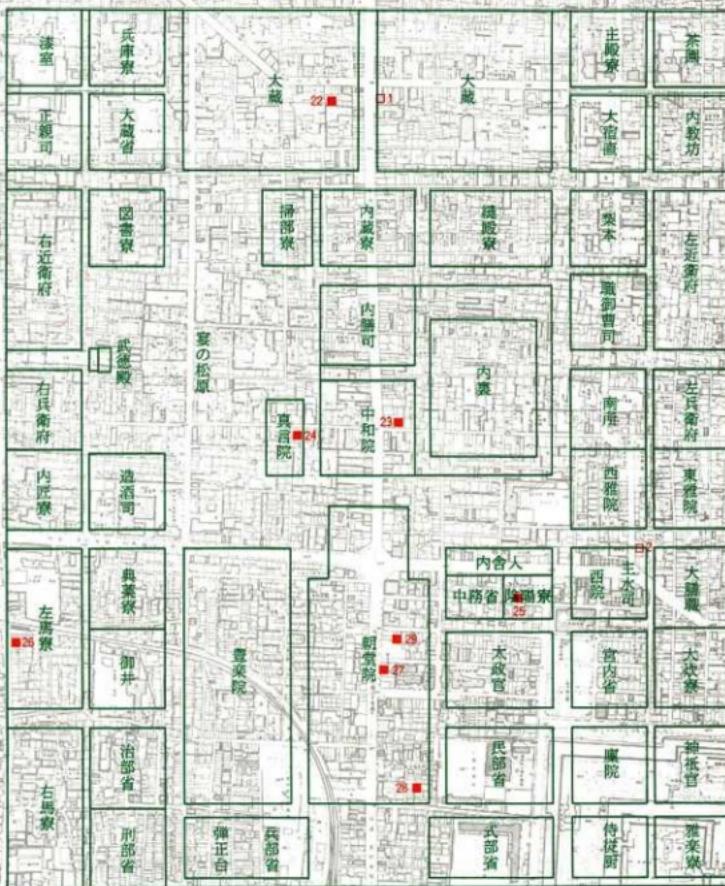
□ 1月～3月

■ 4月～12月

----- 遺跡範囲

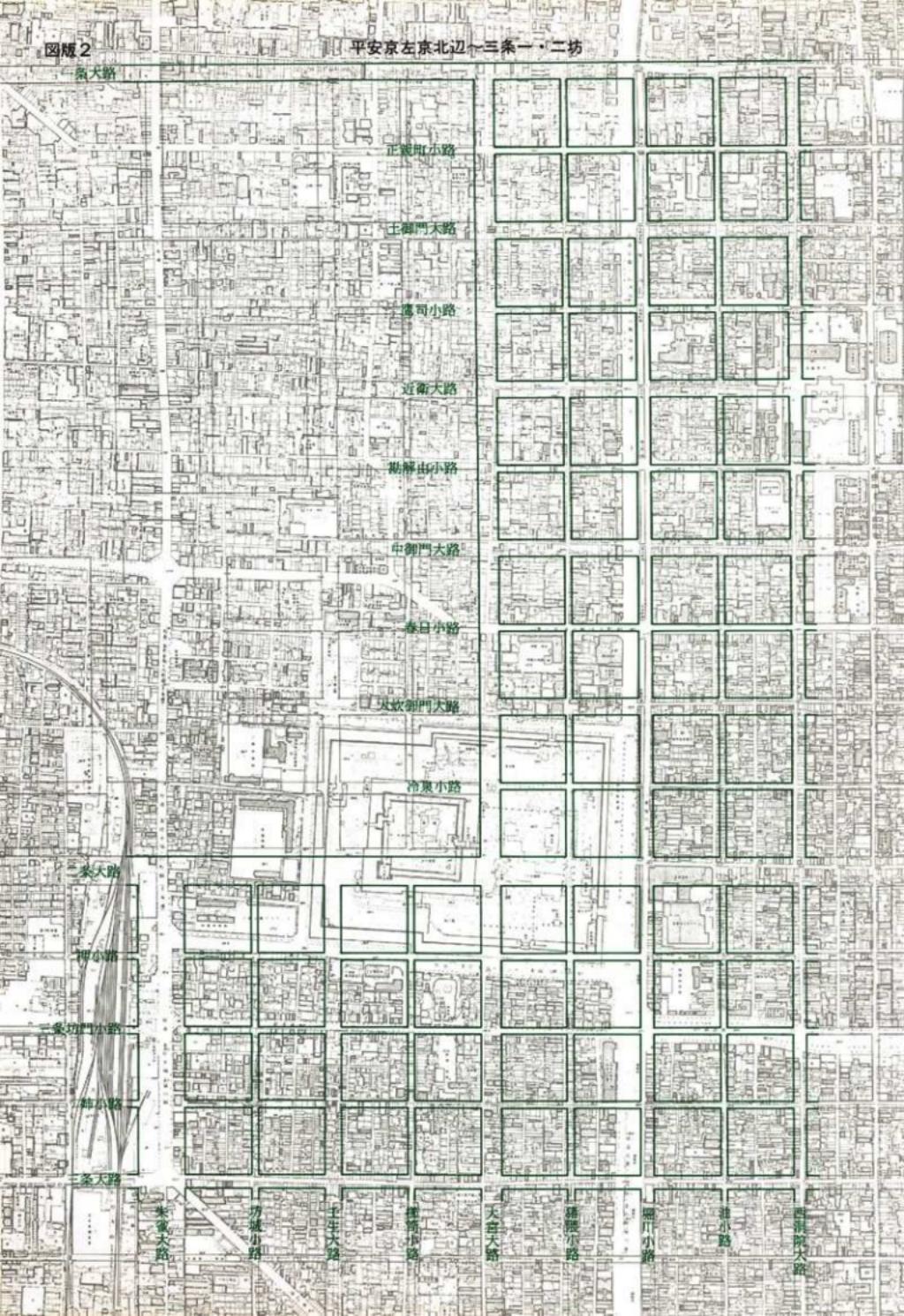
平安宮

図版1



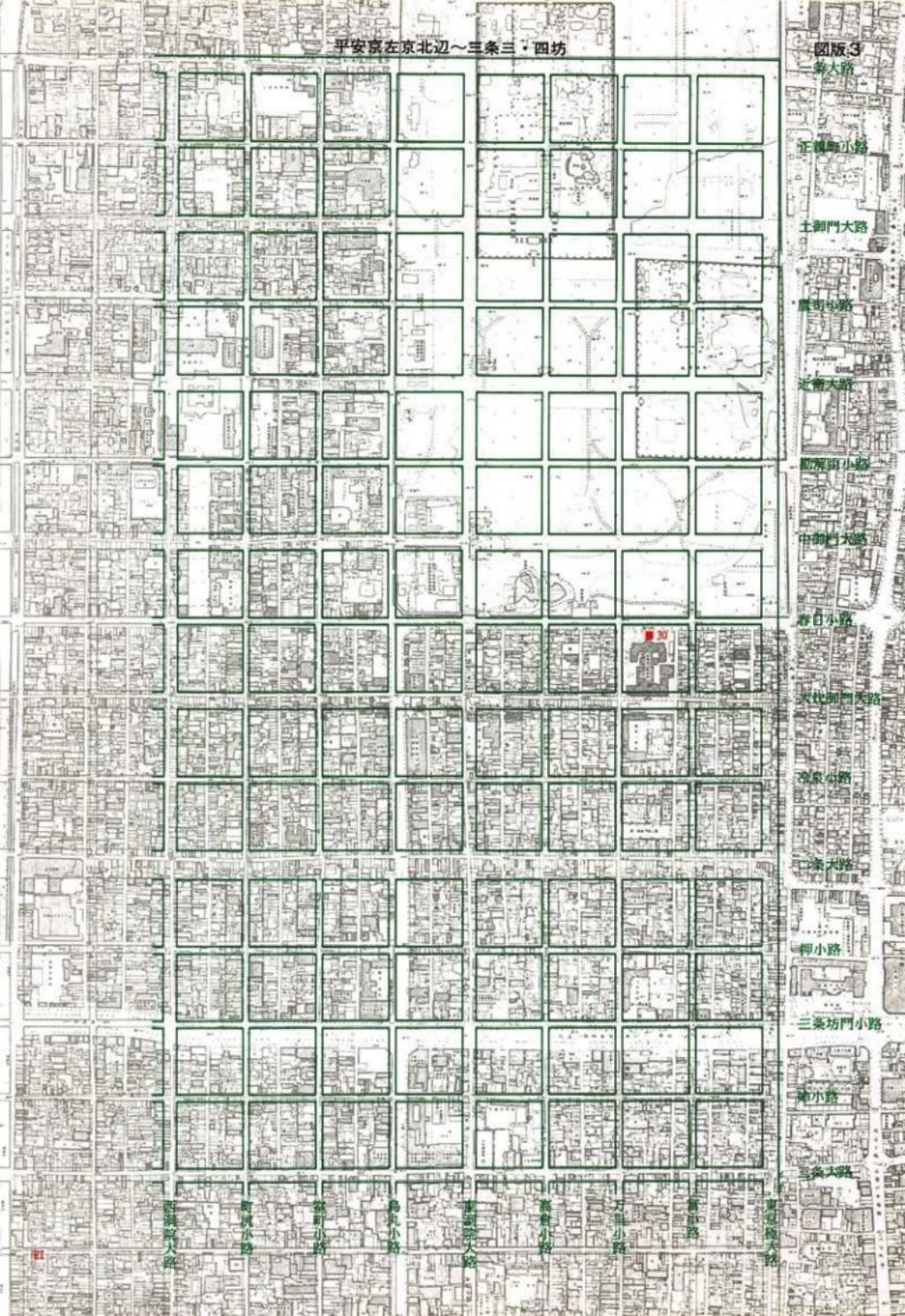
図版2

平安京左京北辺～三条一・二坊



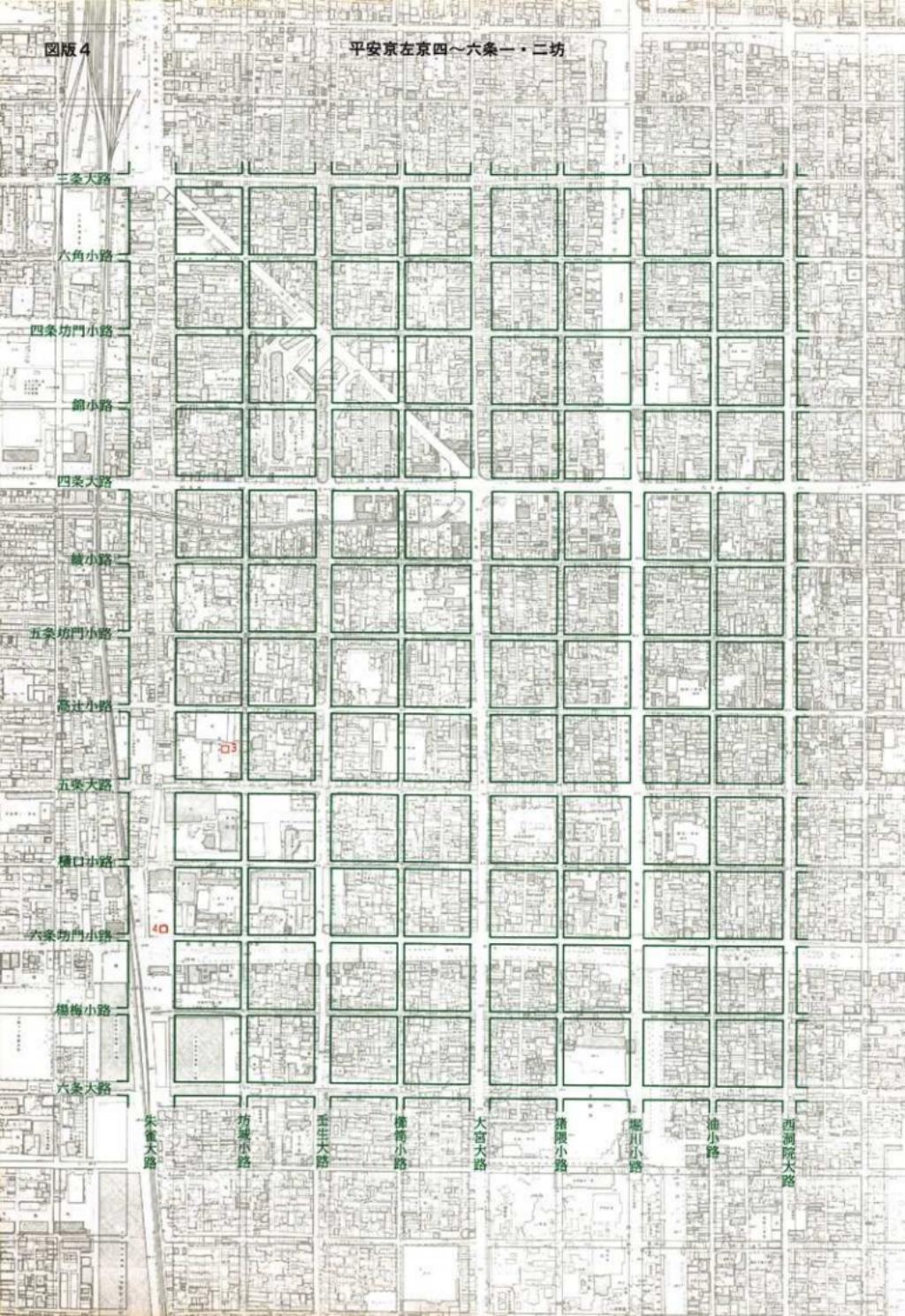
平安京左京北辺～三条三・四坊

圖版3



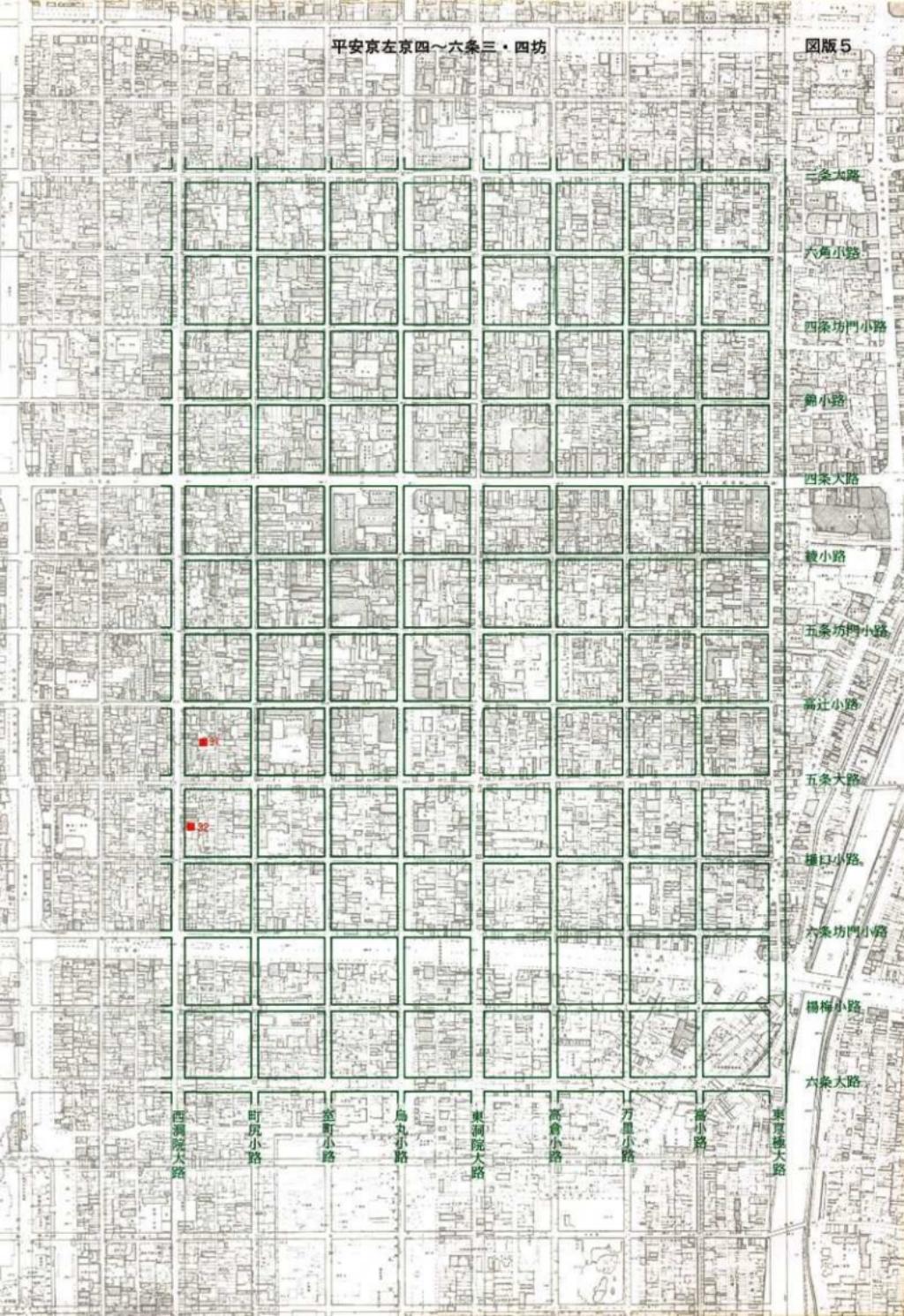
図版4

平安京左京四～六条一・二坊



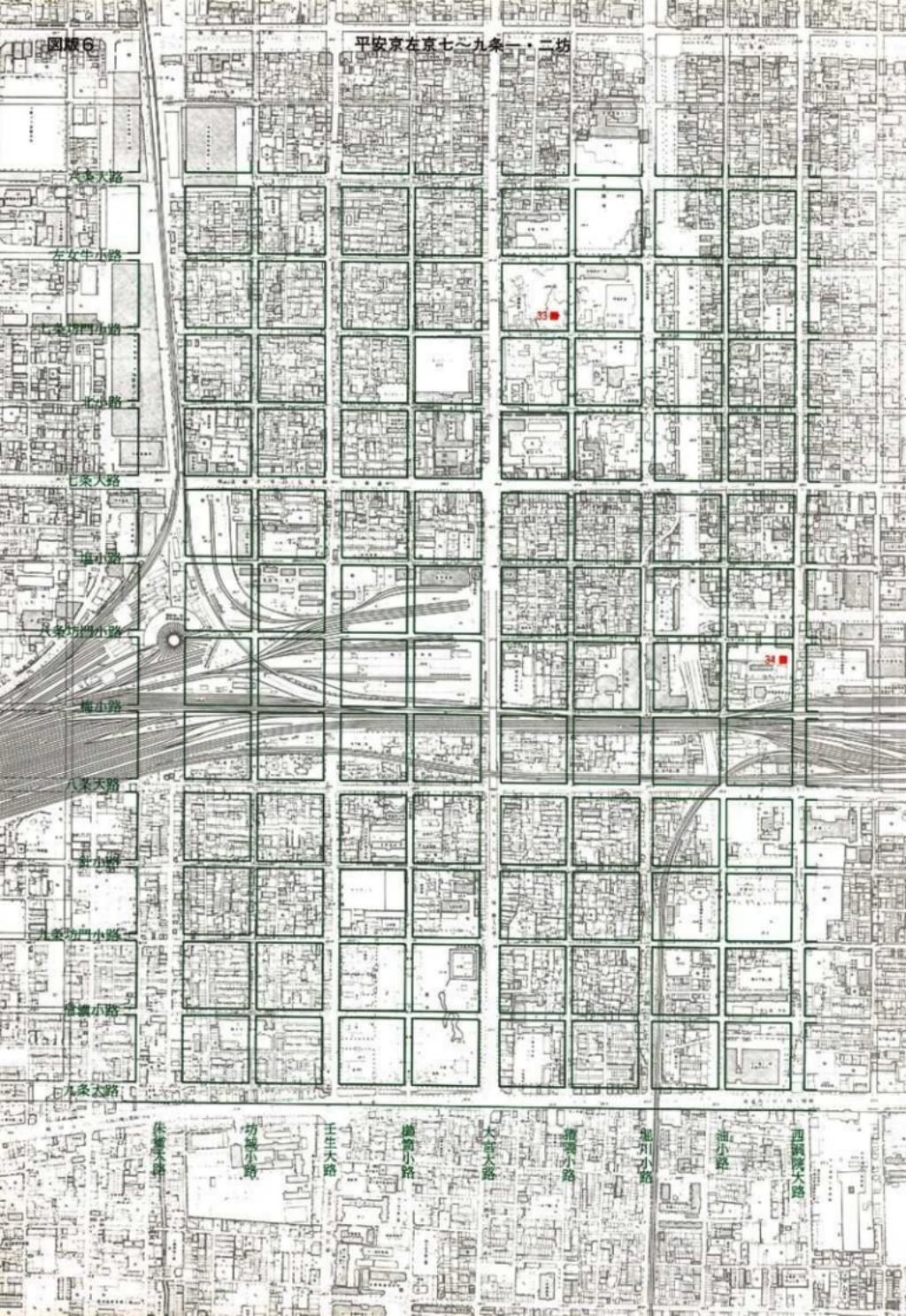
平安京左京四~六条三・四坊

圖版5

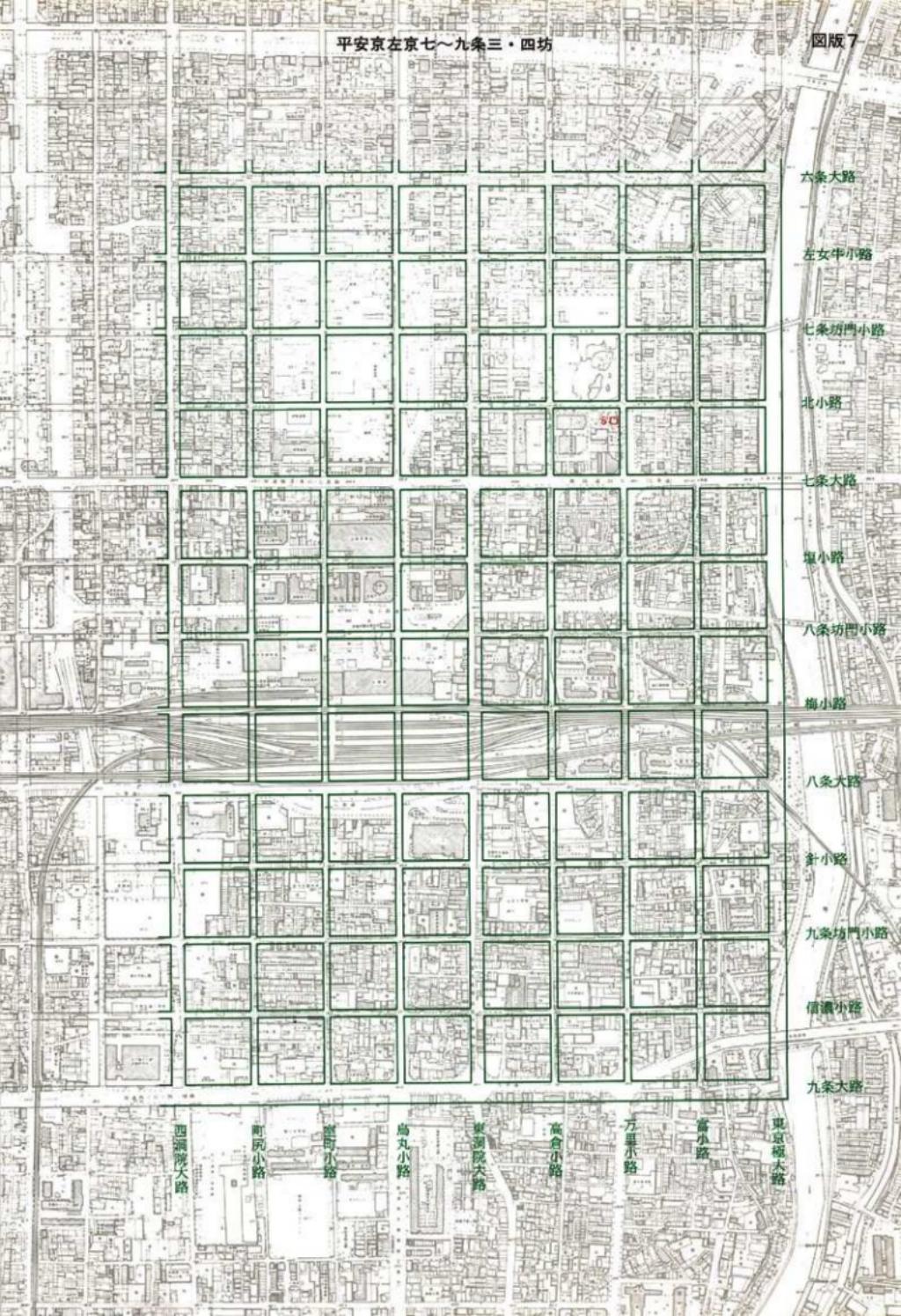


図版6

平安京在京七～九条一・二坊



平安京左京七～九条三・四坊



図版8

平安京右京北辺～三条三・四坊

一条大路

正銀町小路

土御門大路

萬司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

紳小路

三条大路

西京極大路

無着小路

山小路

菖蒲小路

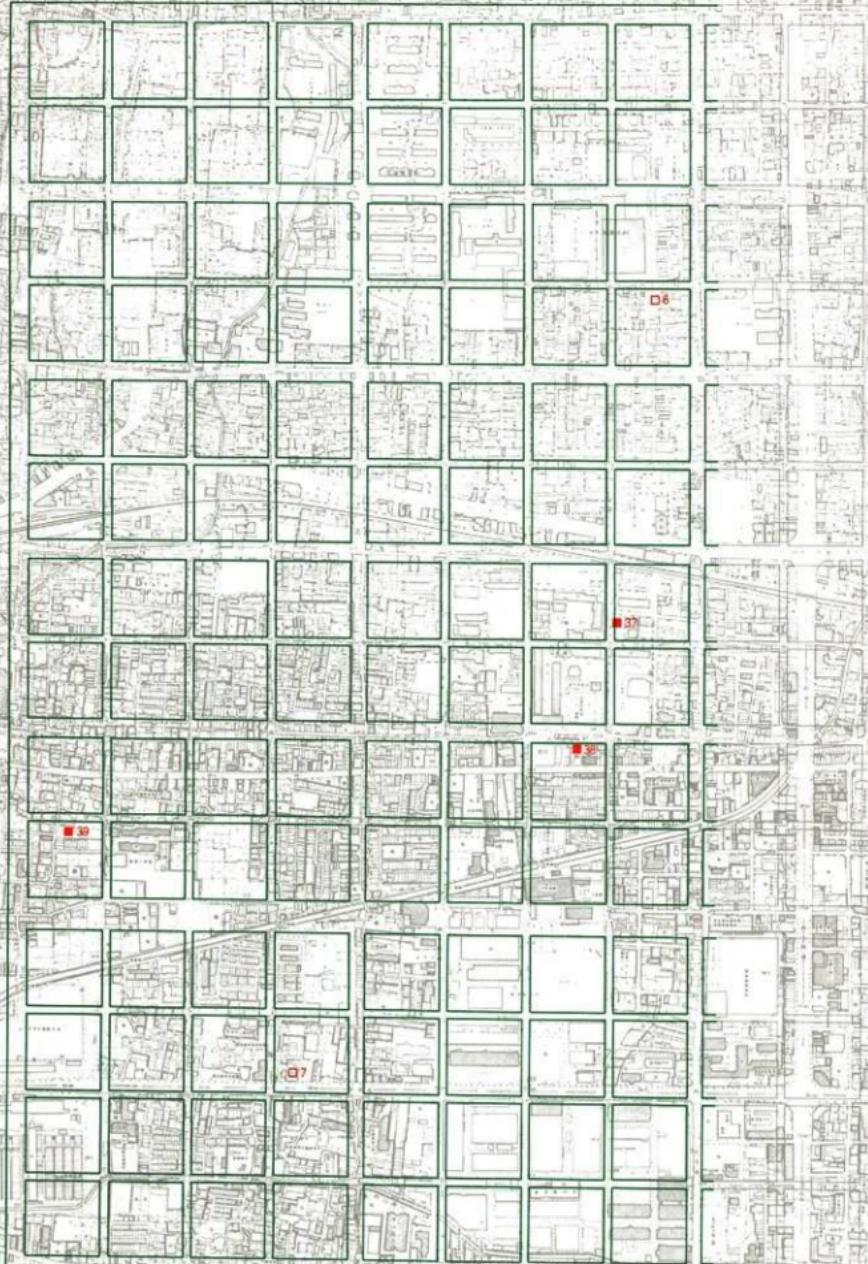
木道大路

恵生利小路

馬代小路

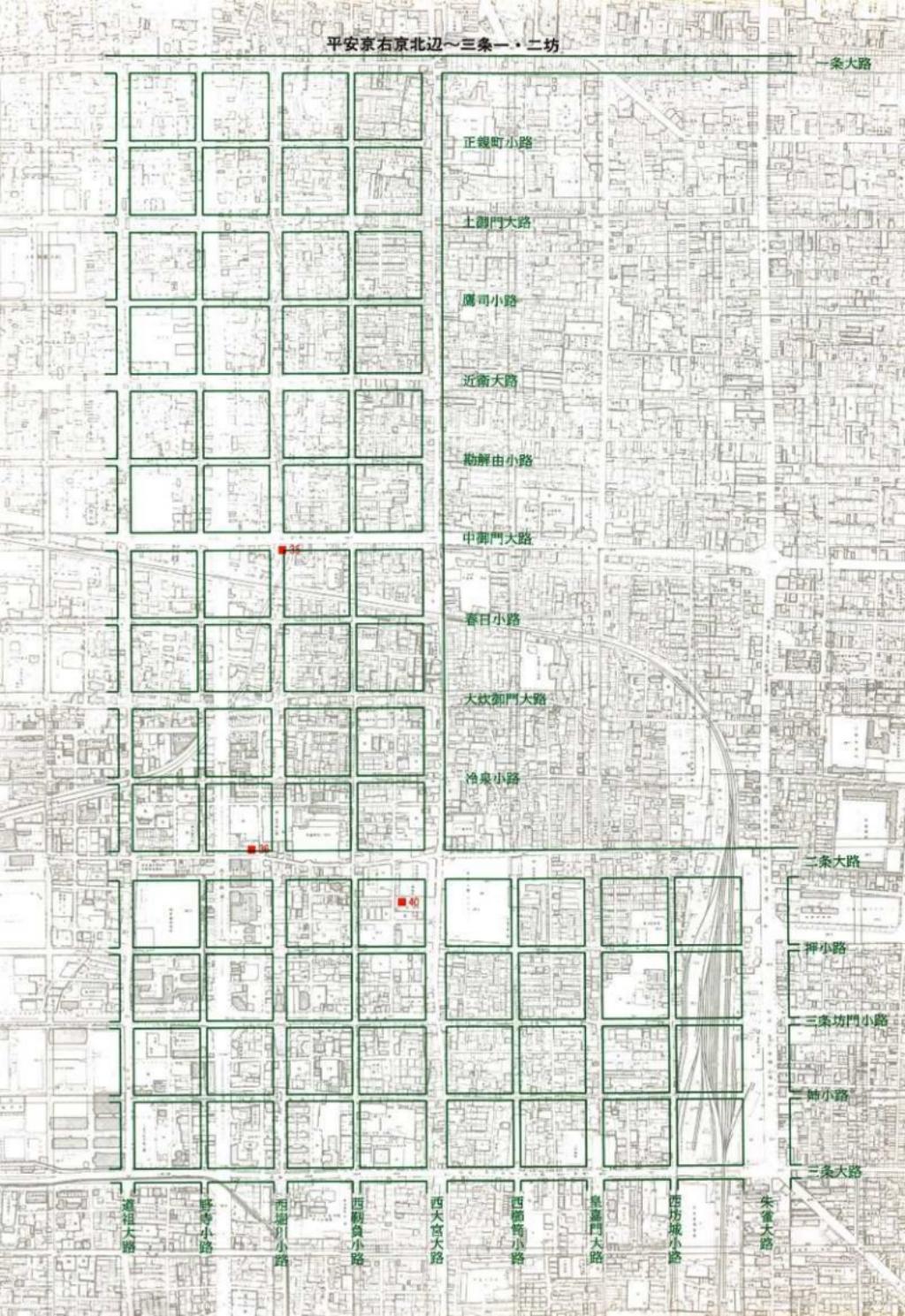
之多小路

清祖大路



平安京右京北辺～三条一・二坊

一条大路



道祖大路

將寺小路

西堀川小路

西御負小路

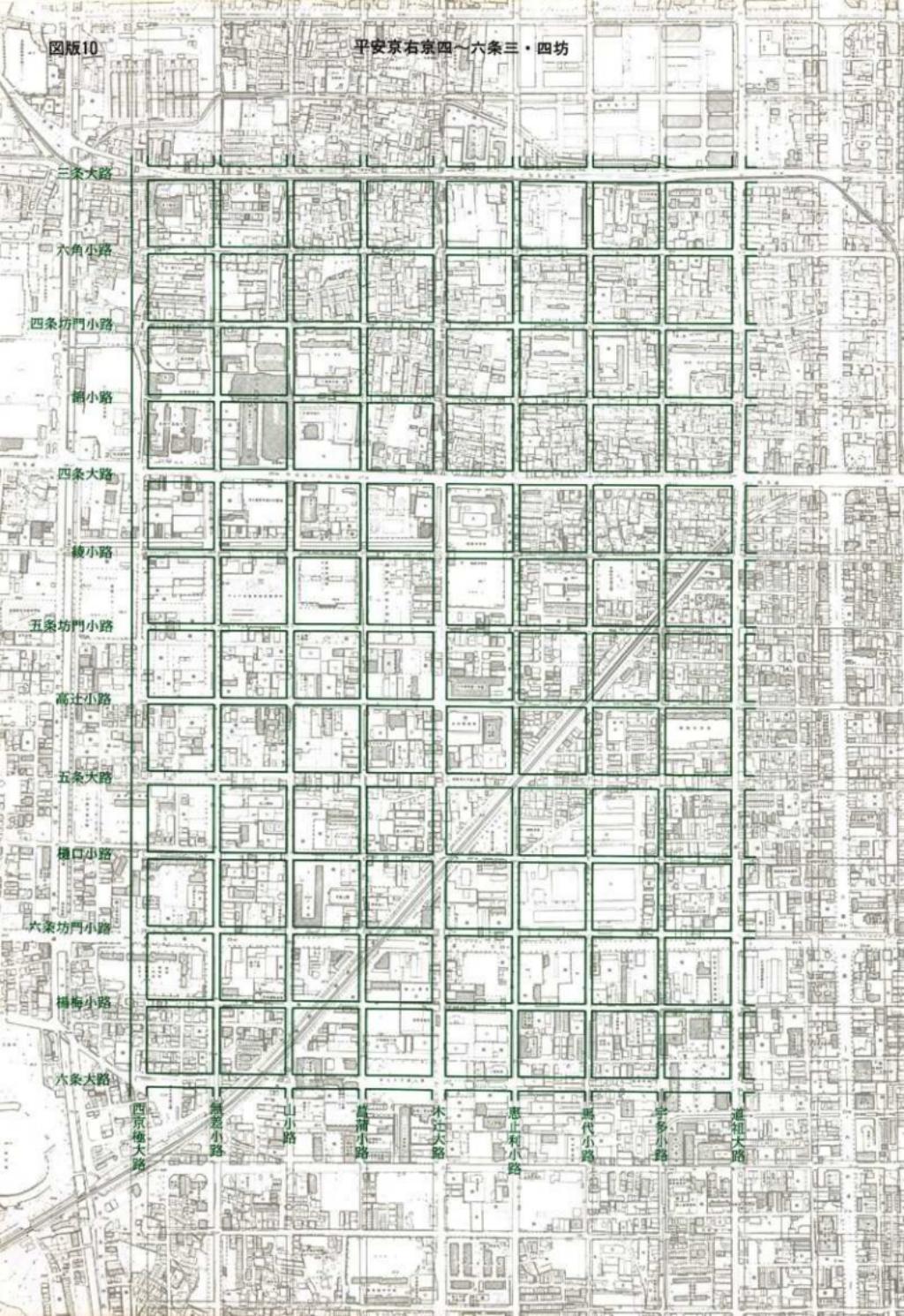
西大宮大路

東御負小路

東御門大路

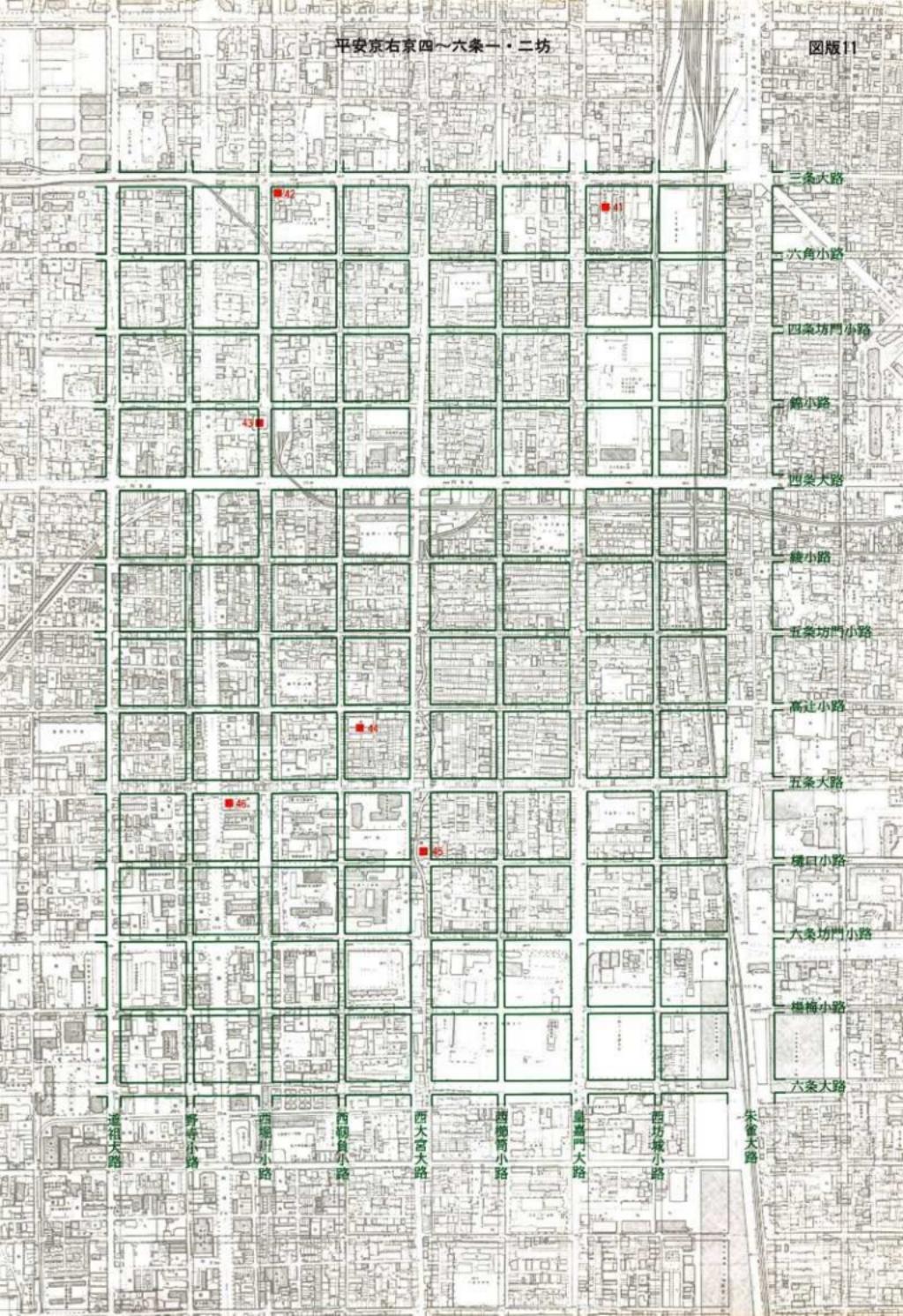
西坊城小路

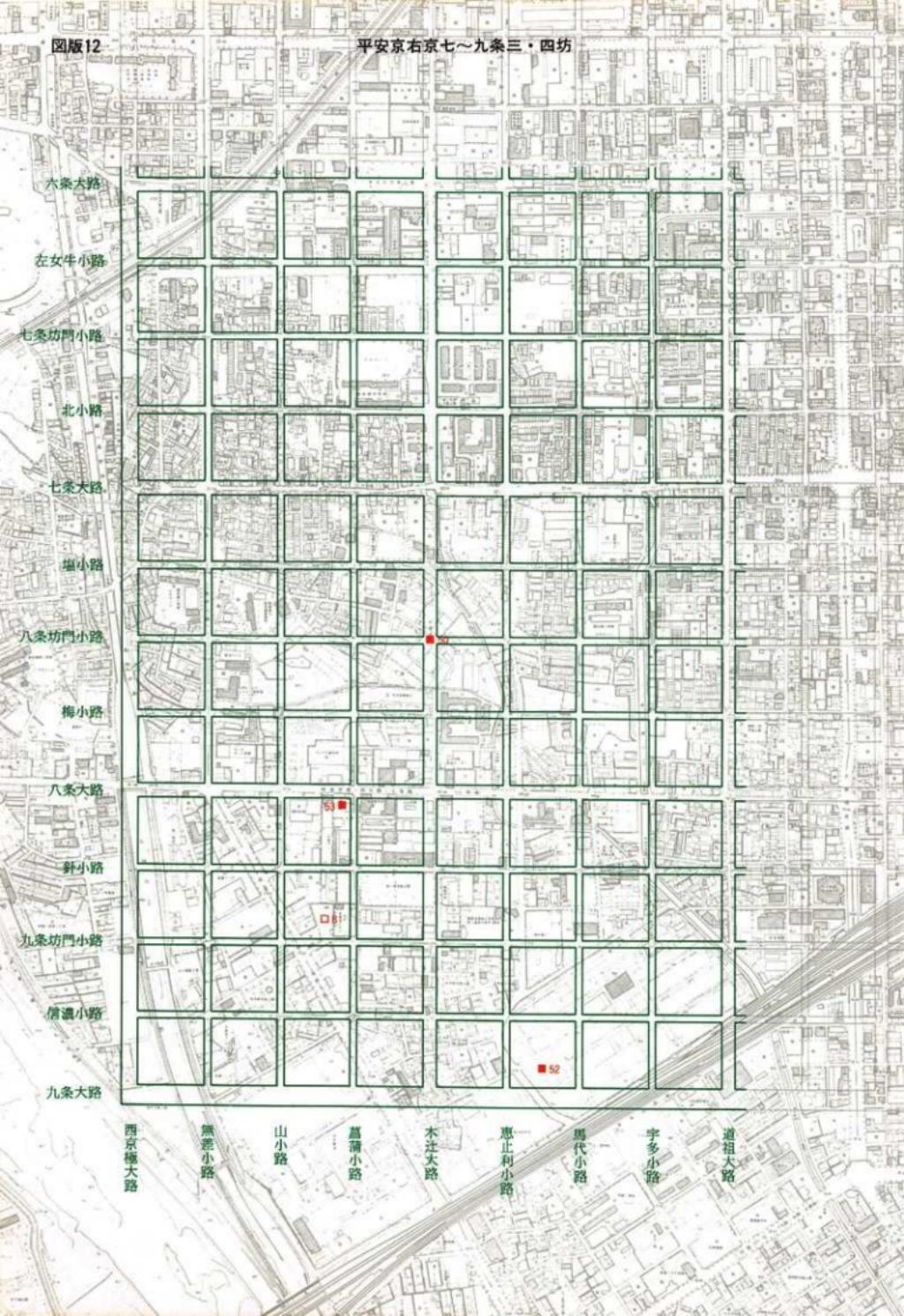
朱雀大路



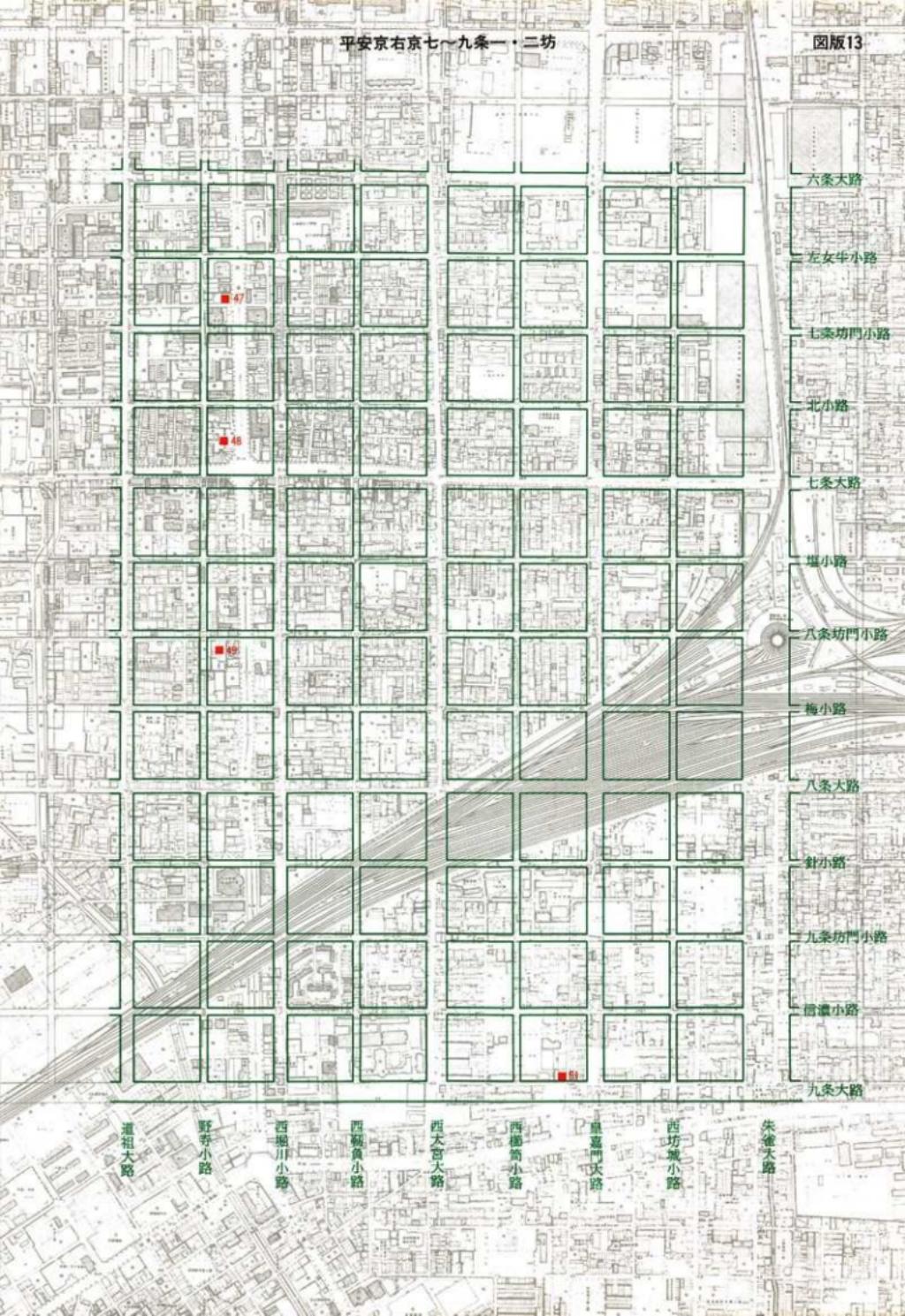
平安京右京四～六条一・二坊

図版1-1

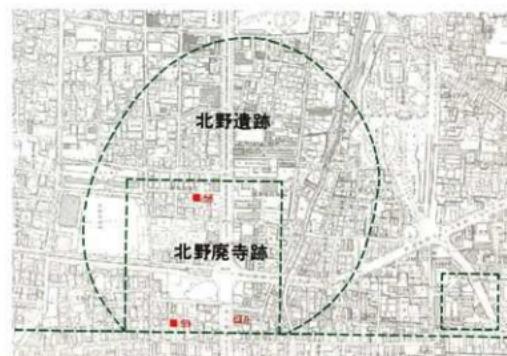




平安京右京七~九条一・二坊



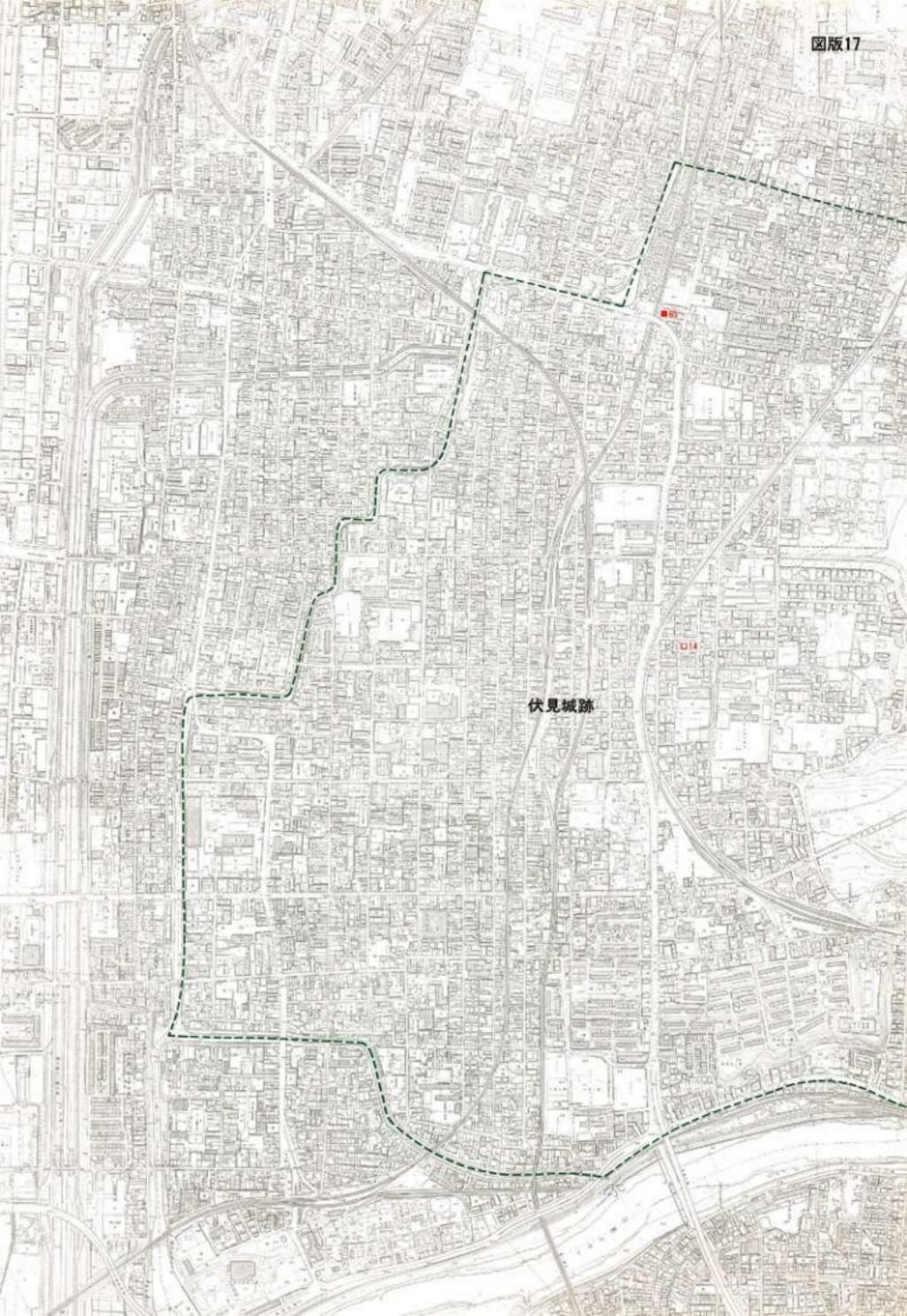
図版14

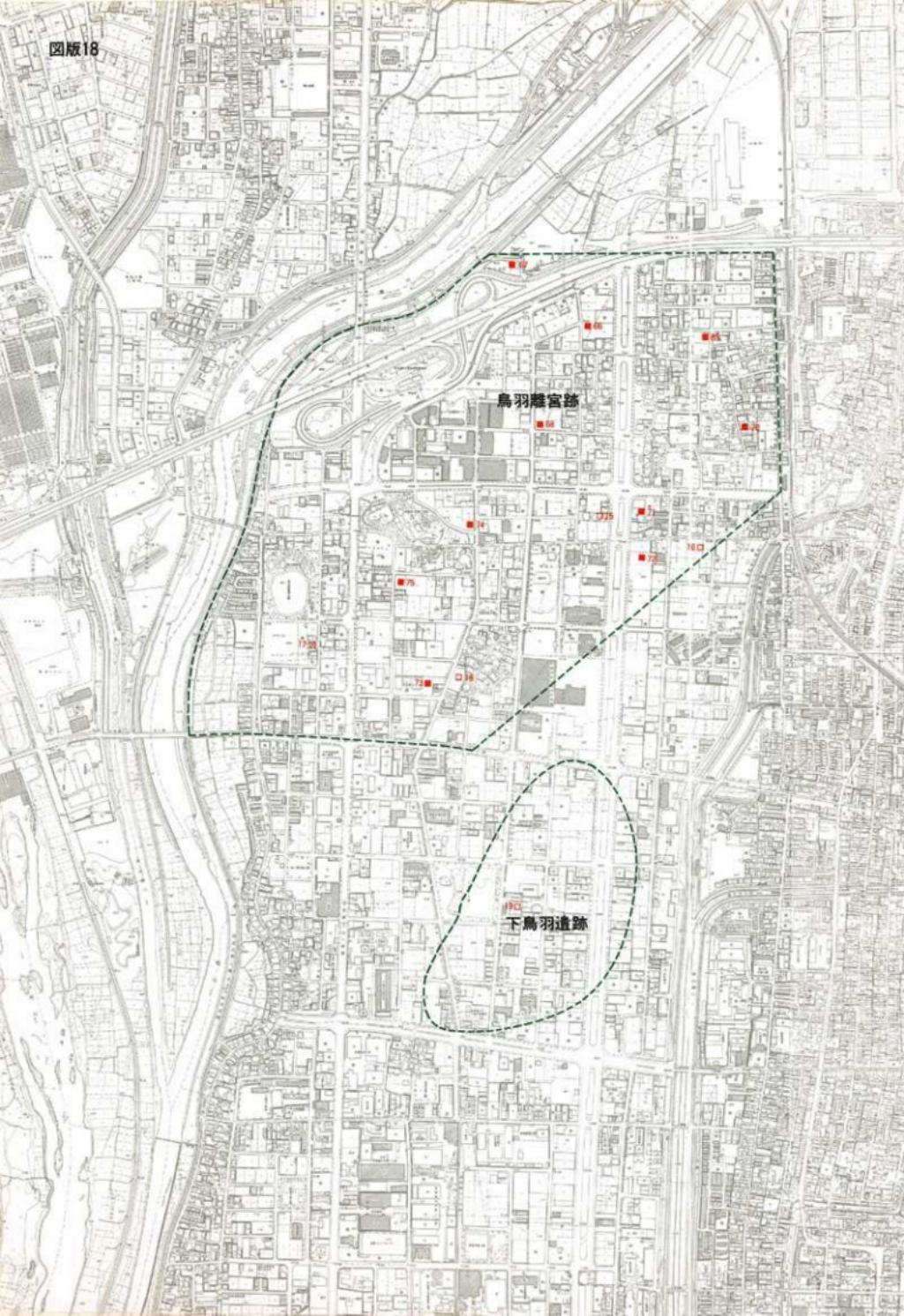




図版16









京都市内遺跡試掘調査概報

平成 8 年度

発行日 平成 9 年 3 月 31 日
発 行 京都市文化市民局
編 集 京都市埋蔵文化財調査センター
住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL (075) 441-5261
印 刷 株式会社エッグズ